

大里村文化財調査報告書 第1集

埼玉県大里郡大里村

北 廓 遺 跡

1 9 8 8

大里村教育委員会

大里村文化財調査報告書 第1集

埼玉県大里郡大里村

北 廓 遺 跡

1 9 8 8

大里村教育委員会

序

大里村は、荒川上流右岸に位置するのどかな田園地帯であり、自然環境に恵まれた緑ゆたかな村です。

今回報告する北廓遺跡は、村立吉見小学校の増改築工事により遺跡の現状保存が困難であるため、事前に発掘調査を実施し、記録として保存することとなりました。

調査の結果、縄文時代の土壌群、弥生時代の住居跡、方形周溝墓、そして更に館跡の一部を検出するなど予想以上の埋蔵文化財の発見が見られました。その成果をまとめたのが本報告書であります。

これら埋蔵文化財は、先人達がこの地において行った生産活動の結果であり、歴史をかたる貴重な資料です。そして、これら歴史的環境を後世に伝えて行くことが私達の責務と考えております。

最後になりましたが、本調査事業の実施にあたりご協力をいただきました埼玉県教育委員会文化財保護課・村立吉見小学校・地元関係者並びに調査及び整理作業に参加された多くの方々に厚くお礼申し上げますとともに、これら、資料が学術研究、学校・社会教育の場で大いに活用され、埋蔵文化財に対する理解へと深められるよう願ってやみません。

昭和63年 3 月30日

大里村教育委員会

教育長 小 池 敬 介

例 言

1. 本書は、埼玉県大里郡大里村立吉見小学校増改築工事(大里村大字箕輪22番地)による発掘調査である。
2. 発掘調査は、大里村教育委員会が主体となり、A地区が昭和61年5月1日より5月7日まで行ない、B地区は昭和61年6月5日より6月17日まで行なった。
3. 調査経費は、大里村教育委員会より支出した。
4. 調査中の写真撮影及び遺物の写真撮影は出縄康行が行なった。
5. 遺構、遺物の実測・トレースは、出縄康行が中心となり行ない、拓本は清水利浩、若林尚子、坂上さよ子、松本友子等が行なった。
6. 本書の執筆・編集は出縄康行が行った。
7. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御助言を賜った。(敬称略)

金井塚良一、村田健二、中村倉司、新井 端、金井塚
厚志、鳥羽政之、堀 宏行、吉田 茂

発掘調査の組織

調査主体者 大里村教育委員会 教育長 小池敬介

事務局 大里村教育委員会

教育次長 矢島利夫

社会教育係長 (元)金子富夫(前)角山

祥隆(現)塚本敏子

担当者 社会教育係主事 出縄康行

作業員 11名

目 次

序

例言

目次

I．発掘調査に至る経過 1

II．遺跡の地理的・歴史的環境..... 1

III．調査の概要

1．調査の概要..... 4

2．調査の経過..... 5

IV．A地区の遺構と遺物

1．遺 構..... 7

2．出土遺物.....10

V．B地区の遺構と遺物

1．遺 構.....13

2．出土遺物.....17

写真図版

插图目次

第1图	遺跡位置図	第10图	B地区出土土器拓影図
第2图	遺跡範囲図	第11图	B地区出土土器拓影図
第3图	調査区測量図	第12图	B地区出土土器拓影図
第4图	A地区遺構実測図	第13图	B地区出土土器拓影図
第5图	第1号方形周溝墓実測図	第14图	B地区出土土器拓影図
第6图	A地区出土土器拓影図	第15图	B地区出土土器拓影図
第7图	B地区東区測量図	第16图	B地区出土石器実測図
第8图	B地区遺構実測図	第17图	B地区出土石器実測図
第9图	B地区遺構実測図		

図版目次

図版1	第1号住居跡	図版6	B地区遺物出土状態
図版2	第1号方形周溝墓	図版7	A地区出土土器
図版3	B地区全体	図版8	B地区出土土器
図版4	土壌・柱穴群	図版9	B地区出土土器
図版5	柱穴群	図版10	B地区出土石器

表目次

第1表	B地区出土遺物表
-----	----------

I. 発掘調査に至る経過

大里村は、埼玉県北部地区南端の荒川に接し、地形的に低位扇状地域に位置している。今日の村の経済は米麦耕作を中心とした第1次産業を主とし、村民の経済基盤を形成している。しかし、一方では他産業への移行により第1次産業従事者の減少及び高齢化が進みつつあり、近代化農業の転換をはかっている。

大里村は村制30数年を過ぎ公共施設の老朽化により近年はその改築を進めている。その一貫として大里村立吉見小学校の増改築の計画を昭和60年に大里村は立案、決定した。この村立吉見小学校は昭和34年に建設された木造2階建の建造物であり、既に27年を経過し老朽化が著しい事に要因がある。

昭和61年に事業実施年度に入るが、建設予定地内に於いて埋蔵文化財の所在の取り扱いについて慎重に対処するため、村教育委員会では急遽、学校給食室予定地内（A地区）について重機による試掘調査を5月1日に実施し、弥生時代の遺構・遺物を検出し遺跡であることを確認した。そこで、村教育委員会では協議するが事業変更は日数的に不可能であることから、やむをえず発掘調査によって記録保存とすることとし、調査費は村教育委員会単独費用とすることとした。本調査は5月2日より重機による表土削除を行い、調査を開始した。調査終了日は5月7日に完了した。

本校舎（B地区）においても同様に遺跡の所在する可能性があるため6月5日～6日にかけて試掘調査を重機により実施したところ縄文時代の遺構・遺物を確認した。やむなく発掘調査を実施し、記録として保存することとなった。翌7日より本調査を実施するための表土の除去を行い発掘調査を開始する。発掘調査終了日は昭和61年6月17日に完了した。

II. 遺跡の地理的・歴史的環境

北廓遺跡は大里郡大里村大字箕輪字北廓22番地に所在する。JR高崎線熊谷駅の南西約9kmの比企丘陵先端の箕輪台地上に位置する。箕輪台地は標高27mを測り、丘陵北端との比高差は約13mで一段低い台地である。台地の形状は中央部が平坦で水田面への移行は緩やかである。北側には水田地帯と和田吉野川が流れ、南側は丘陵からの多数の開析谷が開く。

この箕輪台地での遺跡の分布状況は、ほぼ全面において確認されている。先土器時代は未だ確認されていないが、関東ローム層中にカーボン粒が含まれていることから存在する可能性が想定できる。縄文時代では前期が北廓遺跡、中廓遺跡（黒浜式）などで土壌等が検出されている。中期については遺物は見られるものの遺構等は確認されていない。後期から晩期にかけては台地東側の中廓遺跡で安行1～3aの土器群が表採されている。

弥生時代に入ると北廓遺跡を中心に集落を営んでいたと思われ、他の地点では遺物等は見られない。この北廓遺跡内に所在する吉見小学校の校庭には方形周溝墓や住居跡と思われるプランをみる

ことができる。古墳時代に入ると県選定重要遺跡のとうかん山古墳（金井塚1979）が現存するが、周囲の遺物分布からかなりの埴輪片を拾うことができるので他にも古墳が存在したと思われる。集落跡では中廓遺跡、番場遺跡、東松山市域の玉太岡遺跡、岡遺跡等に和泉期～鬼高期の住居跡、土壌等が検出されている。奈良・平安時代に入ると台地南側の比企丘陵寄りに賢木岡遺跡があり、ほぼ9世紀後半の集落跡がある。

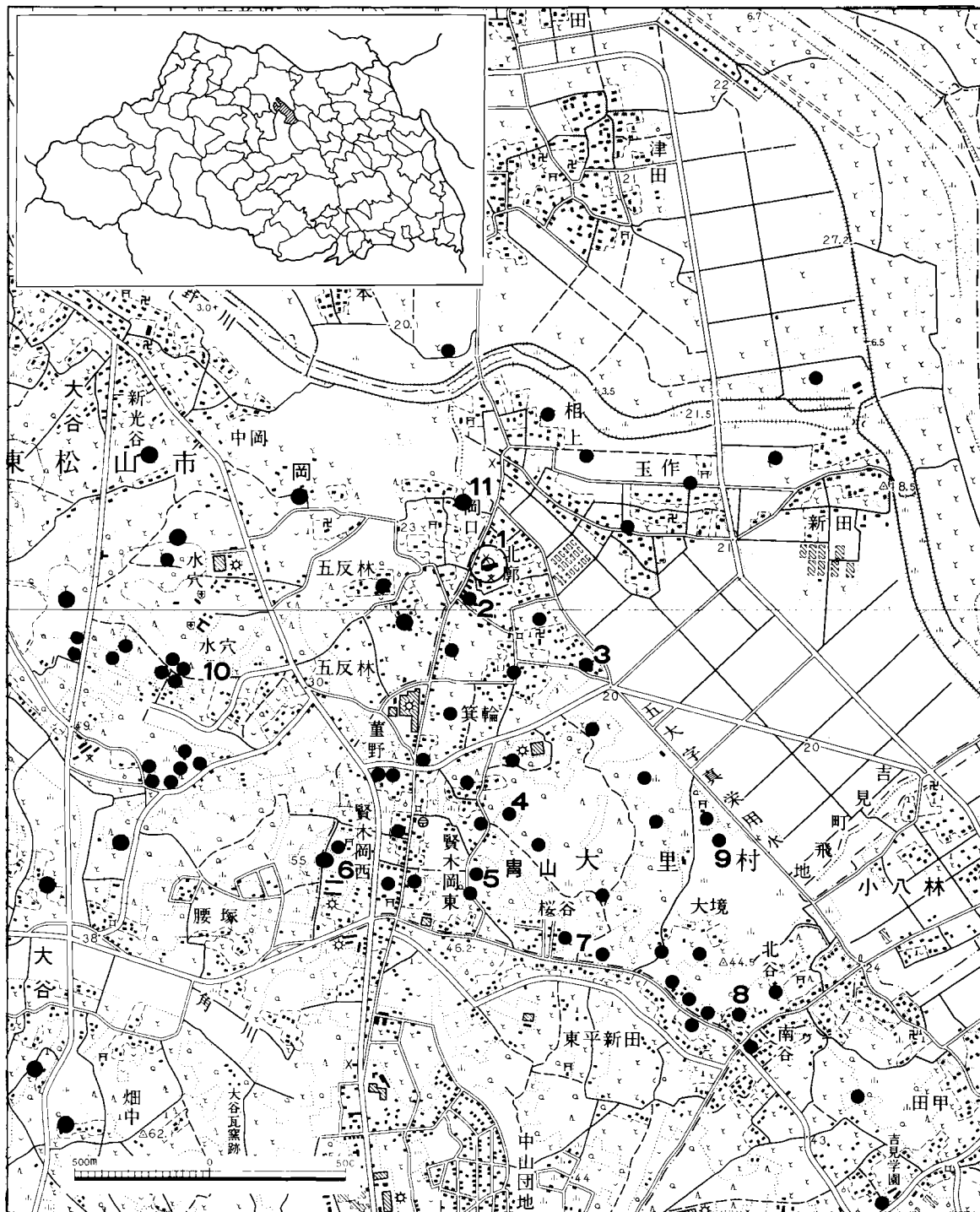
中世に入ると地名から想定できるように館跡の所在であるが、今回の発掘調査B地区において水溜井戸及び柱穴群を検出し、また、調査区より南へ約100mの所に土塁が所在することなどから、小学校を中心に館跡が所在したとみられる。しかし、時期や館主については不明な点も多い。

以上が箕輪台地の遺跡分布状況である。縄文～弥生時代にかけては台地東側に偏るが、古墳時代に入ると集落が台地全面に広がり、奈良・平安になると丘陵寄りに偏る状況がみられる。中世では台地北側に館を構えるようになる。つぎに、本遺跡と関連がある周辺の遺跡を概観してみたい。

先土器時代については、比企丘陵北東部の桜谷北遺跡（出縄1987）でナイフ形石器1点を出土し、東松山市大谷の雷原遺跡等が近隣では確認されている。

縄文時代前期の黒浜式、諸磯式土器の出土遺跡は、比企丘陵北東部では青山遺跡（鈴木1986）で諸磯a式の住居跡1軒が検出され、桜谷北遺跡（出縄1987）では同時期の土壌を検出している。南比企地方では、緑山遺跡（井上ほか1979）から黒浜、諸磯a式の住居跡3軒、土壌6基を検出し、桜山古墳群（井上ほか1981）、立野遺跡（今井ほか1981）等では諸磯a又はb式土器を出土している。一方、荒川右岸の江南台地から寄居段丘面に目を向けてみると、川本町の船山遺跡（梅沢1972）においてまとまった諸磯a・b式土器が出土しており、さらに寄居段丘面には甘粕原遺跡、ゴシン遺跡（並木1978）が所在する。荒川左岸においては塚屋遺跡（市川ほか1984）等があるものの荒川右岸と左岸での縄文時代前期の遺跡の集中密度には違いが見られよう。

次に、弥生時代の遺跡を概観してみたい。比企丘陵では、櫛状工具による波状文・篋状文を文様主体とする岩鼻式土器（金井塚1962）と縄文を主体文様とする吉ヶ谷式土器（金井塚1965）の二系統の土器群が存在する。本遺跡では両者の出土を住居跡や方形周溝墓から見られるものの明瞭な並存関係として捉えるには不安を感じる。周辺の遺跡では、南へ約4kmには標式遺跡となった岩鼻遺跡群が所在する。なかでも中原区（小峰1978）では17軒の住居跡にて岩鼻式土器を出土している。松山台地では雉子山遺跡（金井塚他1977）の2軒で岩鼻式土器を出土している。高坂台地では駒掘遺跡（駒宮1974）で14軒の住居跡と方形周溝墓1基にて吉ヶ谷式土器を出土している。本村では、船木遺跡（佐藤他1973）の2軒の住居跡において吉ヶ谷式土器を主体に出土している。丸山遺跡（若松1984）では住居跡2軒と方形周溝墓1基が検出されている。この2遺跡は和田吉野川を望む台地上に位置し、眼下には水田面が広がる状況であり、北廓遺跡も同じ立地上に位置している。



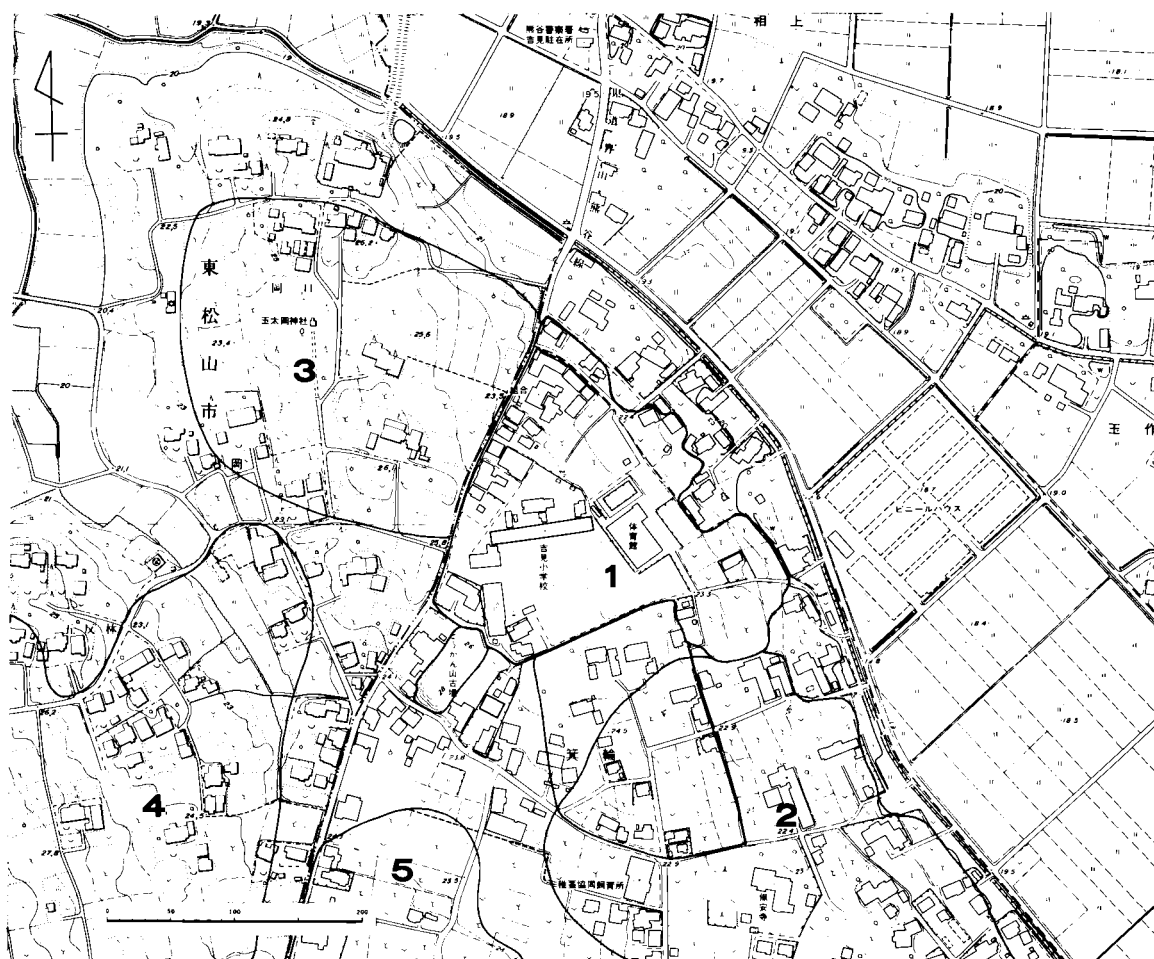
1. 北廓遺跡 2. とうかん山古墳 3. 中廓遺跡 4. 楓山古墳 5. 東山古墳
 6. 冑山古墳 7. 桜谷遺跡 8. 北谷南遺跡 9. 船木遺跡 10. 三千塚古墳群

第1図 遺跡位置図 S = (1/25,000)

Ⅲ．調査の概要

1．調査の概要

北廓遺跡は、箕輪台地の北側を集落の中心とする。台地中央部は平坦で水田面へは緩く移行する。標高26mで水田面との比高差は7mを測る。遺跡の基準層序は、第1層（表土）暗褐色土10～20cm、第2層暗褐色土10～20cm、第3層褐色土10～20cm、ソフトローム10～15cm、ハードローム20～30cmを測る。調査区の旧地形は北への緩斜面であったが、旧学校建設に際して台地中央部を削り斜面部を埋めて平坦面を構築し学校敷地としている。よって、A地区では現地表面から旧地表面までの深さは住居跡で最大が約1mを測り、更に遺構確認面までの深さが50cmを測る。B地区東地点はA地区より更に現地表面と旧地表面との差があり、遺構確認面までの深さが最大で2mを測り、調査に多大な困難が伴う結果となった。



1．北廓遺跡 2．中廓遺跡 3．玉太岡遺跡 4．岡遺跡 5．賢木岡遺跡

第2図 遺跡範囲図 S = (1/2,500)

A地区の調査により弥生時代吉ヶ谷期の住居跡1軒、同時期の方形周溝墓1基、土壇1基を検出した。住居跡と方形周溝墓との距離は約4mである。住居跡の位置は比較的平坦面に構築されている。土壇は住居跡に隣接し覆土からは多量の焼土がみられた。一方、方形周溝墓は斜面上部に構築され、周溝も斜面に対して平行に掘られている。したがって住居跡側から見ると墓は一段高い面に位置するようにみることができる。遺物出土については、確認面での遺物は小破片の遺物が多く、遺構内では少量の遺物がみられる程度であった。

B地区は、試掘調査のトレンチを15本入れ、調査に際しては東区・中央区・西区を設定した。遺構が検出された東区及び中央区についてトレンチを拡張し本調査を実施した。東区の傾斜は緩いが中央部との比高差は2mを測る。検出遺構は縄文時代前期諸磯期の土壇8基、中世の柱穴群及び水溜井戸1基を検出した。諸磯期の土壇群は重複するものもあり、また、確認面においては遺物集中がみられるなど住居跡が周辺に所在する可能性が高い。中世の柱穴群は3回の建て替えを行っており列を呈する。水溜井戸については、柱穴群と伴うものかは判断しがたいが関連するものとして捉えておく。本遺構を水溜井戸としたのはローム層中において構築され、礫層に達していない事により捉えている。これらの中世の遺構については、字名や隣接地での土塁の存在から館跡としてみることができる。ただ、古文書、伝承等は一切ない状況であり、時期についても遺物が限られることなど即断出来ない状況である。

2. 調査の経過

A地区

本遺跡の調査は、調査経過において記したように緊急発掘であるため、調査体制、調査期間について不十分ななかで開始された。

5月1日 学校給食室予定地にトレンチ2本を設定し、重機による試掘調査を開始する。確認遺構は住居跡、方形周溝墓をそれぞれ1基を確認する。

5月2日 調査区での表土の除去を重機によって行う。

5月3日 住居跡について調査を開始するが、ゴミ穴による攪乱が酷く調査の妨げとなった。方形周溝墓の確認作業を行う。

5月4日 住居跡の調査継続及び、土壇の精査を行う。方形周溝墓の調査に入る。遺物等は少量に留まる。

5月5日 住居跡の図面、写真を終了する。土壇の調査及び方形周溝墓の調査継続する。

5月6日 方形周溝墓の図面、写真撮影を行う。

5月7日 遺構の図面作成する。調査区の全体を撮影し、全調査を完了した。翌8日に埋め戻しを行い、直ちに工事が開始された。

B地区

本地区の調査は、6月5日に開始されたが、児童への騒音の影響、安全面等に注意をはらう。

6月6日～7日 本校舎予定地にトレンチ12本を入れる。調査区内にはコンクリート製の池や旧校舎の基礎などにより調査に影響を来した。東区、中央区に遺構を確認する。

6月7日 西区においては遺構等は確認されず、全体写真の撮影ののち埋め戻す。

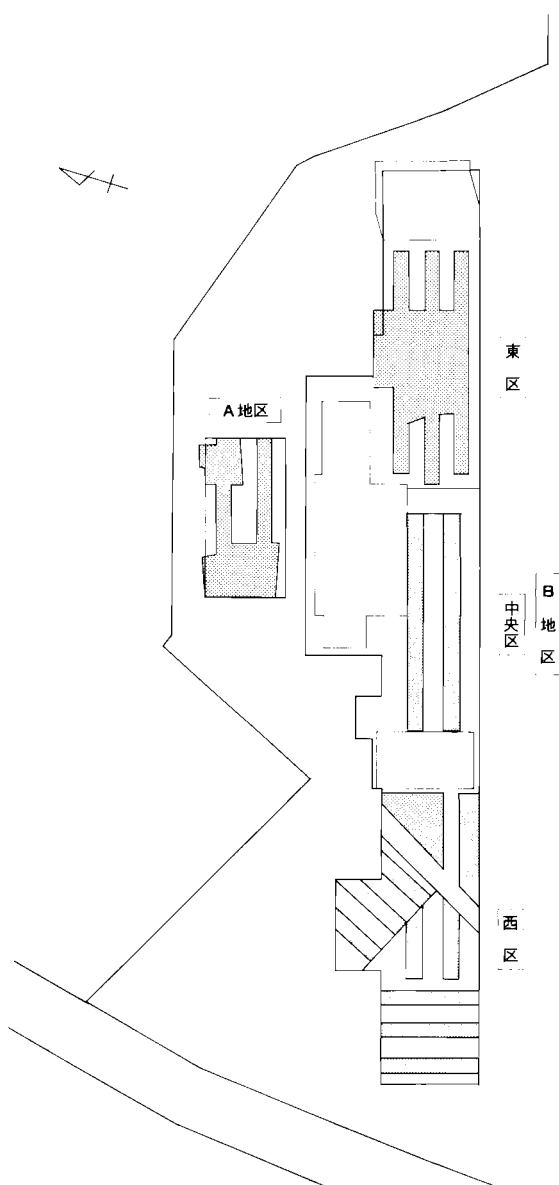
中央区を精査し竪穴状遺構を確認する。

6月8日 東区の精査を行う。柱穴群及び土壇群を確認し、調査を開始する。

6月9日 中央区の全体写真を撮影し、調査を終了する。

6月14日 東区遺物分布図、土壇のセクション図を作成する。

6月17日 東区の全体写真を撮影し、全調査を終了する。



第3図 調査区測量図

Ⅳ．A地区の遺構と遺物

1．遺 構

北廓遺跡A地区において検出された遺構は、弥生時代の住居跡1軒、同時代の方形周溝墓1基、土壇2基である。調査区の旧地形は北への緩やかな傾斜地に位置しているが、後の校舎、給食室の建設に際して土盛りを施して建設されていたため調査時の障害となり、また、住居跡が位置する地点は、ゴミ穴が数箇所掘られているなど保存は悪い状況下にあった。

A．住 居 跡

第1号住居跡（第4図）

本住居跡はA地区北西部に位置し、現地表面から深さ1.5mのところで確認された。住居跡の形態・規模についてはその殆どが調査区外であるため不明ではあるが、調査部分の形状から隅丸方形もしくは隅丸長方形に近い形態を呈し、規模は一辺が5m前後と思われる。壁高26cm～34cmを測り、壁溝は調査部分内を全周し、幅19cm～31cm、深さ8～12cmである。炉跡、柱穴は確認されていない。床面は比較的締め平坦である。貼り床は2層で、掘り方は外周に沿って掘られている。

覆土は6層に分かれる。黒色土系を中心に堆積している。遺物の出土は少量であり、出土状態も各層にみられ流入によるものと思われる。

なお、本住居跡の南西には柱穴が検出されており、深さ23cmを測る。この柱穴が本住居跡に伴うかは断定できないが、覆土及び出土土器の時期などからほぼ住居跡と同時期と思われる。

B．方形周溝墓

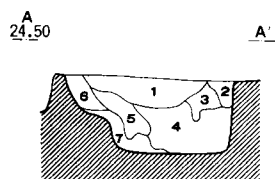
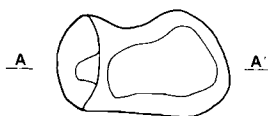
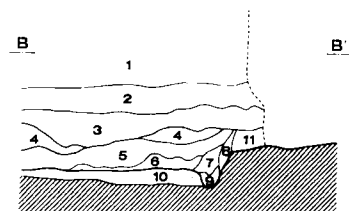
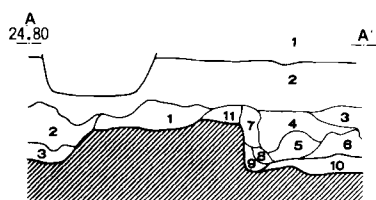
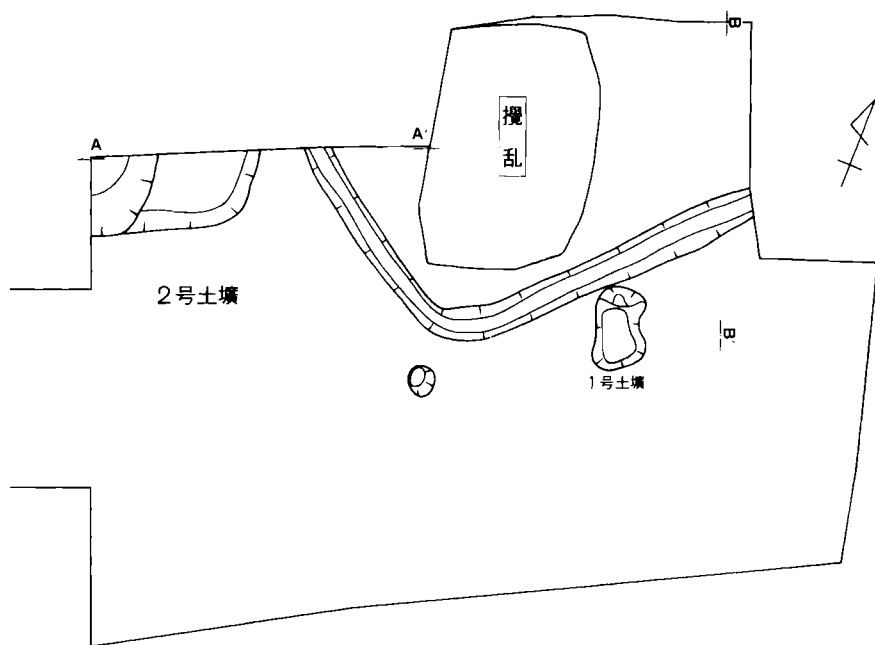
第1号方形周溝墓（第5図）

本方形周溝墓は調査区域の南西部に位置する。調査ができたのは北溝と東溝のそれぞれ一部を検出したのみである。遺構の位置は等高線に沿って北溝が掘られ、東溝がこれに直行する状況を示している。北溝と東溝との間にブリッチを持つ。北溝は長さ4.5m、幅75cm～1.1mである。深さは50cmである。溝底は東へ向かい緩く傾斜し、溝断面は鉢形を呈する。東溝は長さ2.2m、幅1m～1.2mである。深さは43cm～30cmである。溝底は北へ緩く傾斜する。

覆土は11層に分かれ褐色系を基調とする。特に東溝南側においては、土層にも記載されているように焼土が確認されその堆積方向は周溝内側よりのものである。出土遺物は12点であるが、東溝覆土より土製の紡錘車1点が出土した。

第1号土壇（第6図）

住居跡南側に接するようにして確認された。平面プランは不整長方形で、規模は長軸65cm×短軸40cmで、深さは28cmを測る。底面は段を有する。覆土には多量の焼土や炭化粒が含まれているものの、土器等の遺物はほとんどなかった。時期についてはほぼ住居跡と同時期と思われる。



1号土壤

第1号住居跡

1.耕作土 2.暗褐色土 3.黑褐色土 4.暗黑褐色土 5.黑色土 6.褐色土
7.黑褐色土 8.褐色土 9.黑褐色土 10.暗褐色土 11.褐色土

第1号土壤

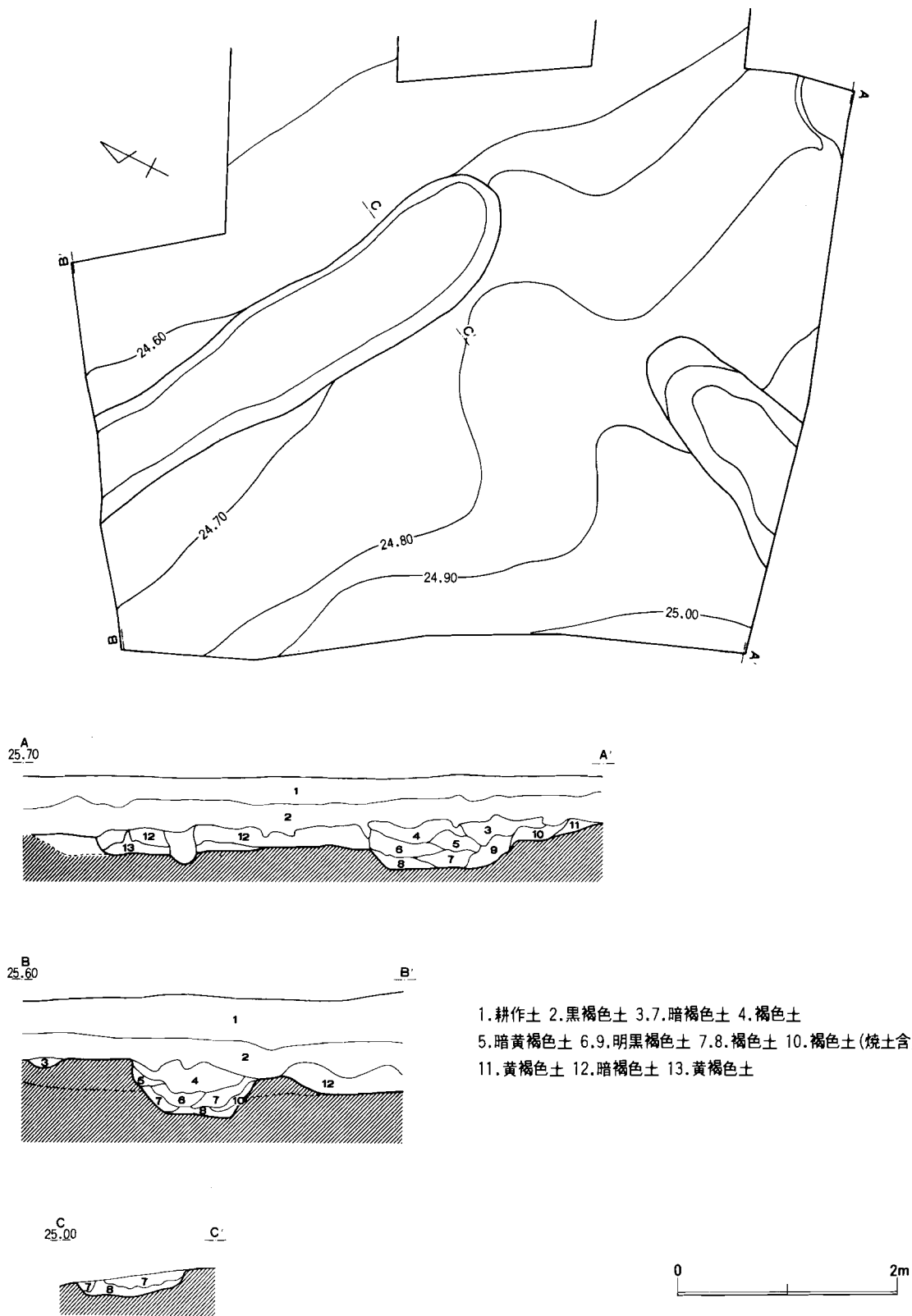
1.黑褐色(烧土多量含) 2.褐色土 3.明褐色土 4.黑褐色(烧土含)
5.黑色土(木炭含) 6.暗褐色土 7.明黑褐色土

第2号土壤

1.黑褐色土 2.明黑褐色土 3.暗褐色土



第4図 A地区遺構実測図



第5图 第1号 方形周沟墓实测图

第2号土墳（第6図）

住居跡西側に位置し、その殆どが調査区外な為、規模等は不明である。遺物は住居跡と同じである。

2. 出土遺物

本調査区の出土遺物は、遺構の検出がみられたにも関わらず遺物58点を数えるにとどまり、この時期の特徴とみることができる。また、隣接するB地区の主流を占める縄文時代前期の遺物は全く確認されていない。

1号住居跡出土遺物（第6図）

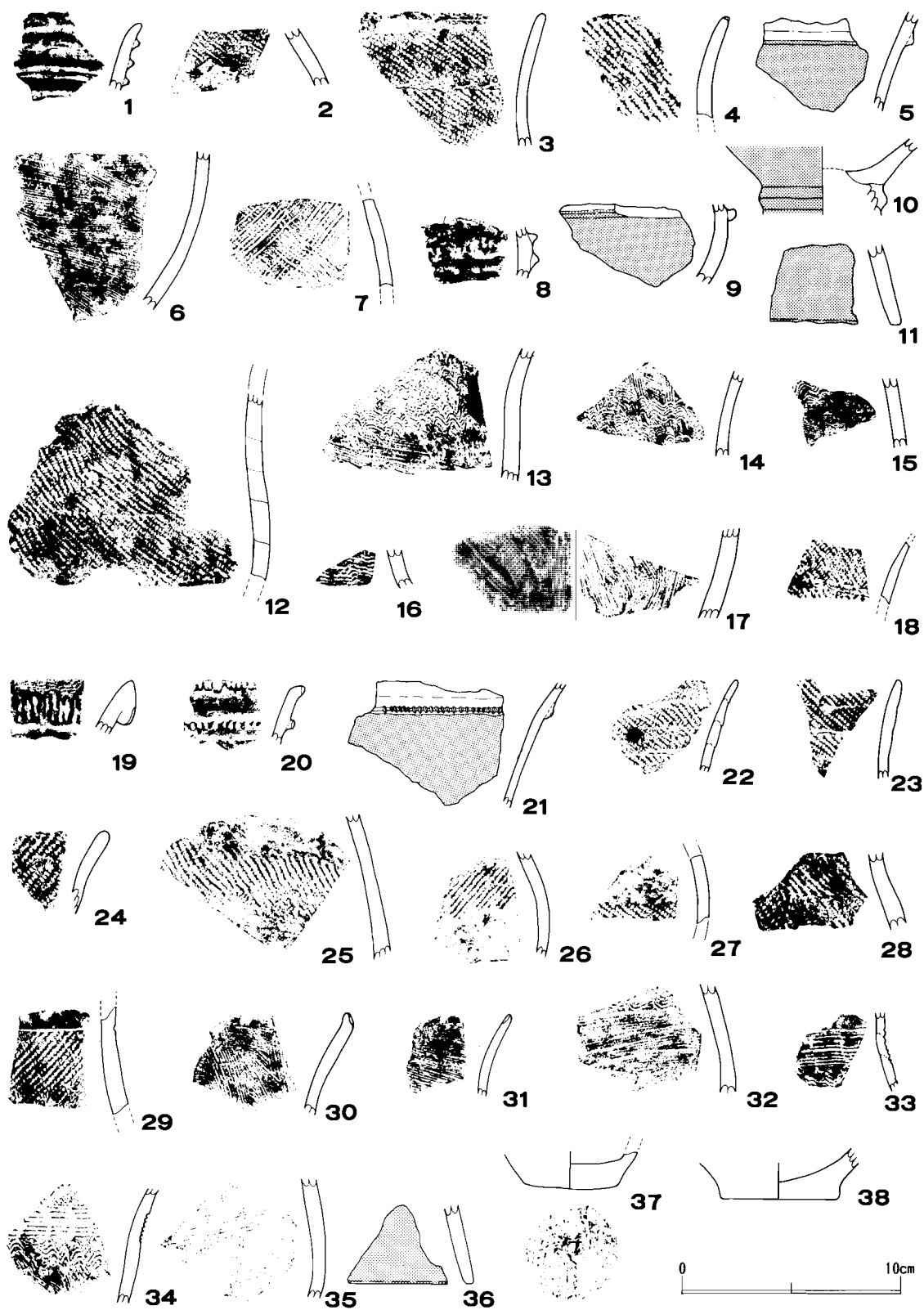
1は甕の口縁部でほぼ直立に立ち上がる。整形は3条の隆帯を貼付しこれに細かく浅い刻みを加える。2は甕胴部上半で整形は撚細RLの単節横位施文する。3は甕の口縁部で頸部の括れは緩くやや外反しながら立ち上がる。整形は撚細RLの単節横位を密に施文し、口唇部にも施す。頸部にはS字状結節を見る。内面は篋状工具による調整を施す。胎土は砂粒、白色粒等を多量に含む。4は口縁部がやや外反ぎみに立ち上がる。整形は口唇や外面に撚細RLの単節横位を密に施文。胎土は砂粒、褐色粒を多量に含む。5は壺の口縁部で直線的に外反する。隆帯を貼付け、外面は朱塗り。6は甕胴部下半で整形は幅1.3cmの刷毛を下方より施す。内面は上方。胎土は褐色粒、黒色粒等多く含む。7は甕胴部上半で整形は幅1.2cmの刷毛を下方より交互にAケース。胎土は砂粒、白色粒等を多量に含む、器面はざらつく。8は高環口縁部で2条の隆帯を貼付けこれに浅い刻みを施す。9は高環縁部で1条の隆帯を貼付ける。10は高環脚部の括れ部で1条の隆帯を配す。11は高環脚部。高環は全て朱塗りを施されている。

1号方形周溝墓出土遺物（第6図）

12は甕胴部で頸部で弱く括れる。整形は撚細RLの単節横位を密に施文する。胎土は砂粒、褐色粒を多量に含むざらつく。13は甕頸部で緩く括れ口縁部はやや外反ぎみに立ち上がる。整形は櫛搔条文により文様は櫛による波状文を施文する。14は甕頸部で口縁部が外反する。整形は櫛搔文で縦位、文様は波状文を数段に施文する。胎土は砂粒、褐色粒等多く含む。色調は黒褐色を基調とする。15は甕胴上位で櫛搔文の波状文を施文する。16は壺頸部で細櫛搔文による波状文を描出する。17は甕胴下半で整形は刷毛による縦位の調整を施す。内面にはススが付着する。32は甕等の底部で、穀殻圧痕を残す。18は甕頸部上半部で外反ぎみに立ち上がる。器厚は薄い。整形は撚細LR単節横位施文を密に施文する。

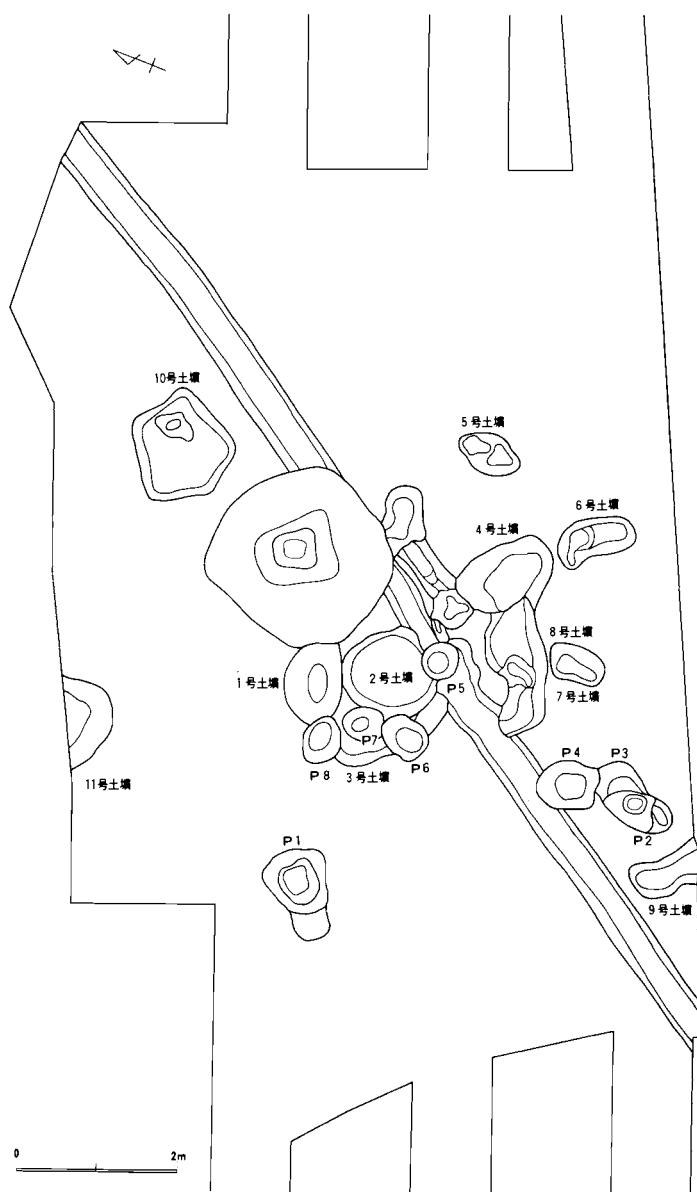
A地区確認面出土遺物（第6図）

19は壺口縁部で折返し口縁である。口唇部には刷毛による波状文を施文し、さらに同工具による刻みを施す。20は口縁部で直線的に立ち上がる。整形は隆帯2条貼付刻みを施す。21は壺の口縁部で直線的に外反する。22、23は甕口縁部で22は外反ぎみに立ち上がる。整形は粘土帯痕跡を残す。文



第6图 A地区出土土器拓影

様は撚細LR単節横位施文を施す。23はほぼ直立に立ち上がる。24は甕口縁部で口唇部がやや肥厚する整形は撚細LR単節横位施文する、口唇部にも施す。25～27は壺の胴部で25、27は撚細RL単節横位施文。26は撚細LR単節横位施文を2段施文する。28の甕胴部上位整形は撚細RL単節横位施文。29は甕胴部上位撚細LR単節横位施文、沈線による区画文を持つ。30、31は甕口縁部で30は口唇部に指圧痕。整形は櫛搔条文を縦位に施文。32は口唇部内に指圧痕。32は甕胴部上位で整形は櫛搔後、櫛搔条工具で波状文を施文。33は緩く括れる頸部で整形は幅1cmの櫛搔工具で結節沈線を2条、下端に波状文を施文する。34は甕頸部で最大径は口縁部にあたる。整形は櫛搔を縦位の後、幅1.2cmの結節沈線櫛搔波状文を施文する。35は甕の胴部で中位が最大径で櫛搔状工具により施文。36は高環脚部で外面に朱塗り。



第7図 B地区東区測量図

V. B地区の遺構と遺物

1. 遺 構

A. 土 壙

本土壙群は、調査区東側において検出されたものである。確認に際しては遺物集中が見られた。土壙内よりの遺物は第3号土壙以外は少量にとどまる。

第1号土壙（第8図）

平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸104cm×短72cm、深さ30cmを測る。断面は浅鉢形を呈する。

第2号土壙（第8図）

平面プランは円形を呈し、規模は長軸114cm×短108cm、深さ41cmを測る。底面は比較的平坦である。出土遺物には第13図2、3等である。

第3号土壙（第8図）

平面プランは不整形を呈し、規模は長軸206cmを測る。本土壙は1、2号土壙、P6～P8の切り合いにより形状は不明瞭である。本土壙では多くの土器破片が出土した。

第4号土壙（第8図）

平面プランは不整楕円形を呈し、規模は長軸120cm×短96cm、深さ32cmを測る。断面は擂鉢形を呈する。

第5号土壙

平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸82cm×短50cm、深さ16cmを測る。

第6号土壙（第8図）

平面プランは不整長方形を呈し、規模は長軸102cm×短48cm、深さ28cmを測る。底面は段差を有する。

第7号土壙

平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸76cm×短46cm、深さ11cmを測る。

第8号土壙（第8図）

平面プランは不整形を呈し、規模は長軸166cm×短69cm、深さ18cmを測る。

第9号土壙

平面プランは不整形を呈し、規模は長軸86cm×短46cm、深さ12cmを測る。

第10号土壙（第8図）

平面プランは五角形を呈し、規模は長軸138cm×短134cm、深さ26cmを測る。底面は平坦である。

第11号土壙

平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸120cm×短58cm、深さ38cmを測る。断面は鉢形を呈する。

B. 柱 穴

本柱穴群は、左記に記した土壙と確認面では違いが見られなかったが調査が進むにつれ柱穴であることを確認した。出土遺物は縄文土器や弥生土器が出土し、また、覆土においては土壙群とはそれほど違いは見られないものの、黒色系の土層が主体を示している。

第1号柱穴（第8図）

平面プランは方形を呈し、規模は長軸74cm、深さ63cmを測る。

第2号柱穴（第8図）

平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸64cm、深さ76cmを測る。

第3号柱穴（第8図）

平面プランは楕円形を呈し、第2号柱穴に切られている。深さ60cmを測る。

第4号柱穴（第8図）

平面プランは不整形を呈し、規模は長軸74cm、深さ62cmを測る。

第5号柱穴（第8図）

平面プランは不整形を呈し、規模は長軸46cm、深さ82cmを測る。

第6号柱穴（第8図）

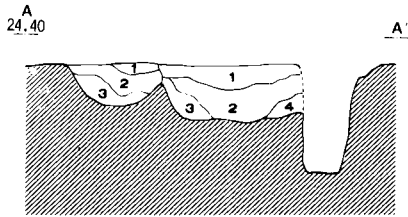
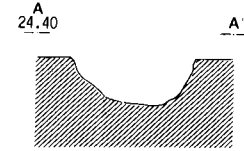
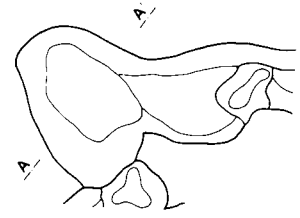
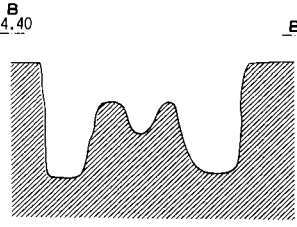
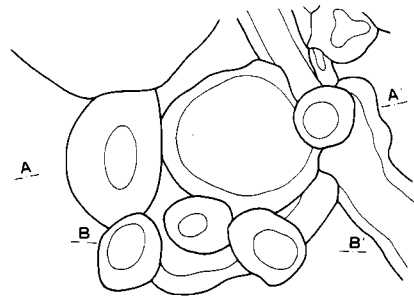
平面プランは楕円形を呈し、規模は長軸62cm、深さ84cmを測る。

第7号柱穴（第8図）

平面プランは不整形を呈し、規模は長軸44cm、深さ73cmを測る。

第8号柱穴（第8図）

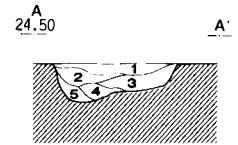
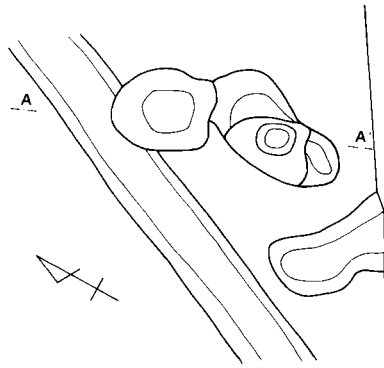
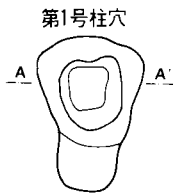
平面プランは不整形を呈し、規模は長軸62cm、深さ88cmを測る。



第1号土壌 1. 黒色土 2. 黒褐色土 3. 褐色土

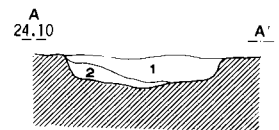
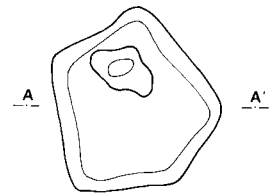
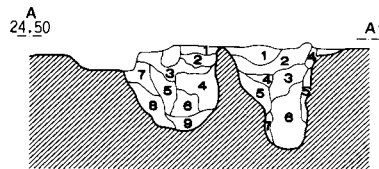
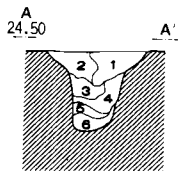
第2号土壌 1. 褐色土 2. 黒褐色土
3. 4. 黄褐色土

第4・8号土壌



第6号土壌

1. 2. 黒褐色土 3. 暗褐色土
4. 黒褐色土 5. 褐色土



第1号柱穴

1. 黒褐色土 2. 暗褐色土 3. 褐色土
4. 黒色土 5. 黒褐色土 6. 褐色土

第2号柱穴 1. 5. 褐色土 2. 6. 黒褐色土 3. 黒色土
4. 黄褐色土 7. 明褐色

第4号柱穴 1. 3. 黒褐色土 2. 5. 褐色土 4. 暗褐色土
6. ロームブロック 7. 暗黄褐色土 8. 黄褐色土
9. 褐色土

第10号土壌 1. 暗黒褐色土
2. 褐色土



第8図 B地区遺構実測図

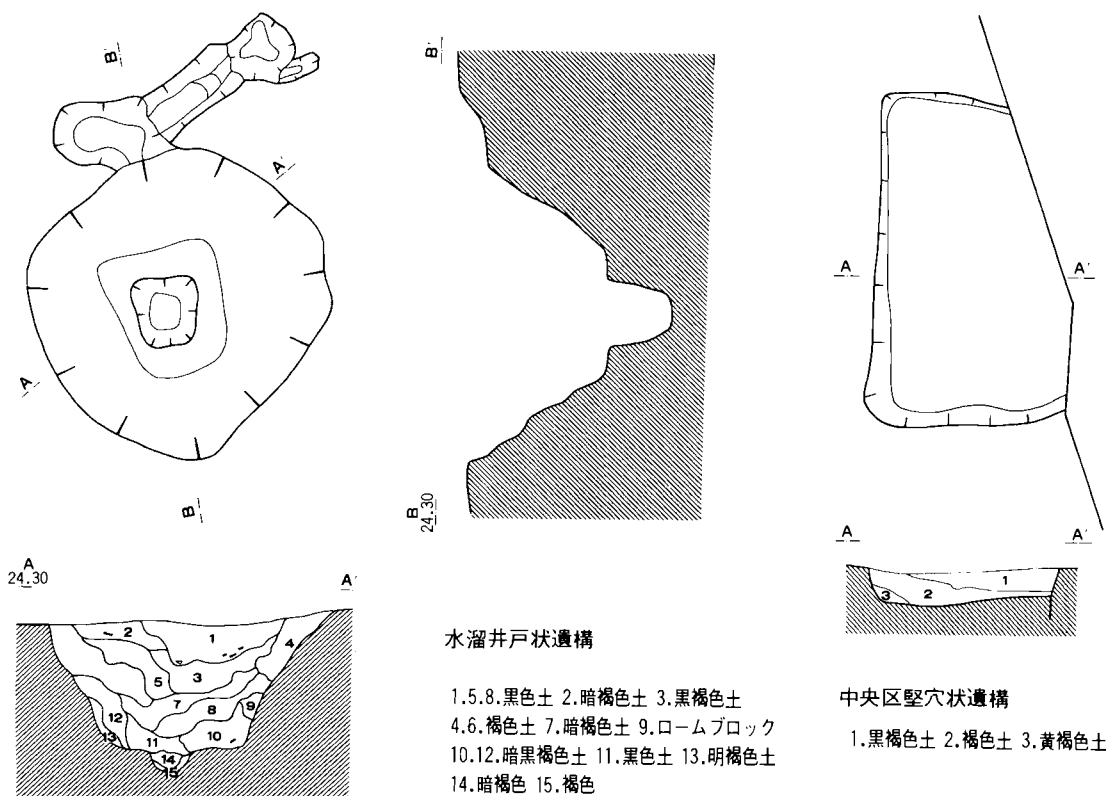
C. 水溜井戸状遺構 (第9図)

平面プランは径約2.38mの隅丸方形で南側隅には本遺構に伴うと思われる溝が敷設されている。深さは、底面までが約97cmでこれより更に約45cmの掘り込みがされている。土層堆積状況は、上層は黒色系の土層を主としており、また、遺物等も多く出土しているが、下層に移行するにつれ堆積土は次第に褐色系に変わり、遺物も少なくなる。本遺構の掘り込み面はローム層中に構築されており、出水の痕跡は認められない。

このような状況からみて、本遺構は水を溜めるために機能する遺構として捉えておきたい。

D. 堅穴状遺構 (第9図)

検出位置は中央区であり、遺構は学校トイレにより壊されている。平面プランは方形または長方形を呈する。規模は西側壁で約2.5mを測る。壁高は約25cmで周溝や柱穴等は検出できなかった。また、土層中には焼土や木炭粒等も見られなかった。床面はほぼ平坦であるが踏み固められてはいない。出土遺物は皆無であるため時期については不明であるものの、土層より見るかぎり比較的新しい時期のものと思われる。



第9図 B地区遺構図

2. 出土土器

当調査区の東地点において、縄文時代前期の遺構や遺物が検出されているが、そのほとんどが遺構確認面の包含層中からの出土であり、第3層がそれにあたる。

土器の分類にあたっては、9群に大別し必要に応じて類別を行った。その基準は胎土中の繊維の混入や施文具及び施文方法等の文様により行った。

第1群土器（第10図1）

前期前半の関山式土器に比定される土器である。胎土中に繊維を含み、地文は羽状縄文で、刻みを施す平行沈線と瘤によるやや曲線的な文様で口縁部文様帯を描出する。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。

第2群土器（第10図2～36、第11図1～14）

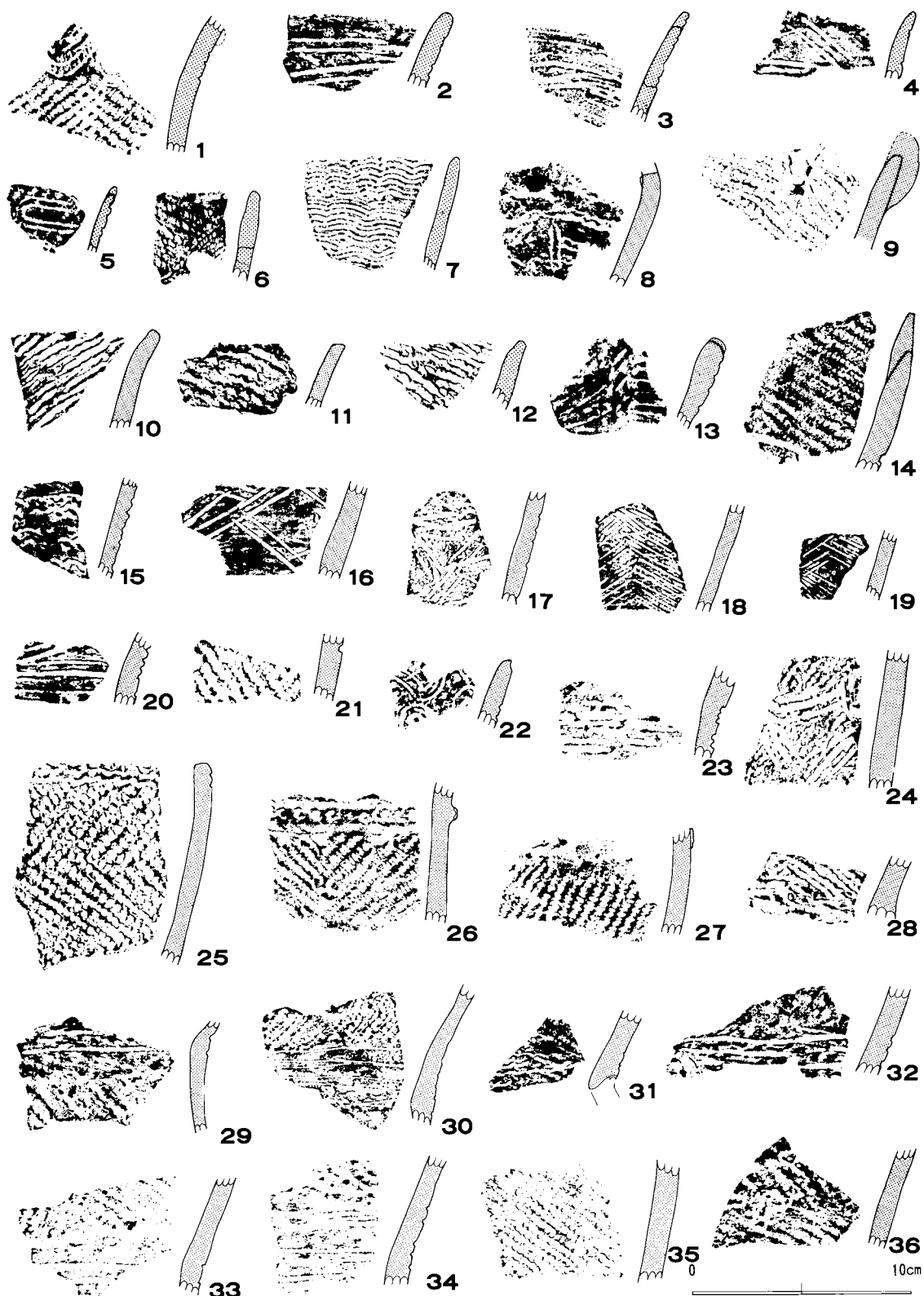
前期前半の黒浜式土器に比定される土器である。胎土には繊維を多量に含み、多孔質化がみられる。色調は暗褐色系を呈するものが多い。器形は頸部で括れ、口縁部が外反する深鉢形が基本器形である。文様は半截竹管による平行沈線文、コンパス文、爪形文及び縄文によって装飾が施される。これらは更に、次の7類に分類される。

A類（第10図2～5、13） 幅の広い半截竹管による平行沈線文が胴部上半に施文される土器類。2は平口縁部で外反する。地文は単節縄文RLの横位施文。2条1単位を2単位として上端区画文とする。3は波状口縁部。2条1単位を2単位として上端区画し、内側に菱形を描出。補修孔有り。4は口縁部下に区画する沈線を施文し、口唇部と区画文との間に菱形を描く。5は小型の土器であり、文様は口縁部に沿って半截竹管による平行線でくの字形に描く。13は波状口縁部で隆帯を縦に貼付ける。口縁部に沿って半截竹管による沈線を数条施す。

B類（第10図16～20、24） 半截竹管による平行沈線で菱形文を施文する土器類。16、17は半截竹管による2条1単位とする沈線で菱形文を描出する。18は沈線を密にして菱形又は綾杉文を描く。19は更に密に菱形文を描出する。20は頸部であり半截竹管による第1次区画文を施文し、口縁部には菱形文等を施文すると思われる。24は単節縄文RLの縦位施文で、菱形文の描きはやや崩れ曲線的である。

C類（第10図7、8、15、22） 半截竹管によるコンパス文を胴部上半に施文される土器類。7は半截竹管により波状文を重施文する。8は口縁部がやや内弯する。地文は単節縄文RLの横位施文。半截竹管によるコンパス文を2条配上端区画とし、これから1条の縦区画を垂下させる。胎土は褐色粒を多量に含み脆い。15はコンパス文による2条1単位の沈線を横位に3条配す。22は瘤とコンパス文により曲線的な文様を描出する。

D類（第10図14、21、23、25～34） 縄文を基調とし、これに区画文としての半截竹管、コンパス文等が施文されたものを一括する。14は波状口縁で、地文は単節縄文LRの縦位施文。沈線による弧線が描かれる。21は地文単節縄文RLの横位施文し、コンパス文により横位区画文としている。



第10图 B地区出土土器拓影图

23は地文単節縄文RLを横位に施文。頸部に半截竹管による断続的沈線を引き第1次区画文として
いる。25は直立する口縁部で地文を横位の波羽縄文を施す。口縁下にコンパス文1条施文する。26
は頸部で地文は単節縄文RLの羽状縄文を縦位に施文。区画文として隆帯を貼付け、これに半截竹
管による結節状爪形文を施す。27は地文を単節縄文RLの横位施文、頸部に隆帯を貼付ける。28は
地文に単節縄文RLを縦位施文し、頸部に区画文として原体LRを押しつける。29、30、32～34は
頸部の括れの強いものと弱いものとに分けられ、文様は頸部に半截竹管による平行沈線文を施しこ
の間を無文帯とする第1次区画文を配する。29の地文は単節縄文RLの横位施文。33は単節縄文L
Rの縦位施文である。31はこの区画文にコンパス文で施文する。

E類（第11図10、12、13、14） 平行沈線文により文様を描出するものを一括する。10は地文が
単節縄文LRの横位施文。横位区画として半截竹管による平行結節文を2条施し、この間を無文帯
とする。12は口縁部が直線的に外反する器形で、地文は単節縄文RLの横位又は縦位施文する。半
截竹管による横位の区画ののち縦に1条の縦区画を施す。これより斜位に1条の沈線を双方に垂下
させる。13は口縁部がやや内湾ぎみに立ち上がる。地文単節縄文RLの縦位施文し、半截竹管によ
る横位の平行沈線を数条施す。14は地文単節縄文RLを縦位施文するが撚りが弱い。文様は平行沈
線が斜位に施文されている。

F類（第10図6、9～12、35、36、第11図1～8） 縄文のみのものを一括した。本来原体によ
ってさらに分類されるべきものである。6は無節を縦位に施文し波状縄文とする。9は口縁部に貼
付文を持つ。縄文は単節縄文LRの斜縄文横位である。10は無節文の横位施文。11は撚りの弱い単
節縄文RLの縦位施文。12は無節文の縦位施文。35は単節縄文LRの縦位施文。36は単節縄文RL
の横位施文で末端部を緩く結んでいる。

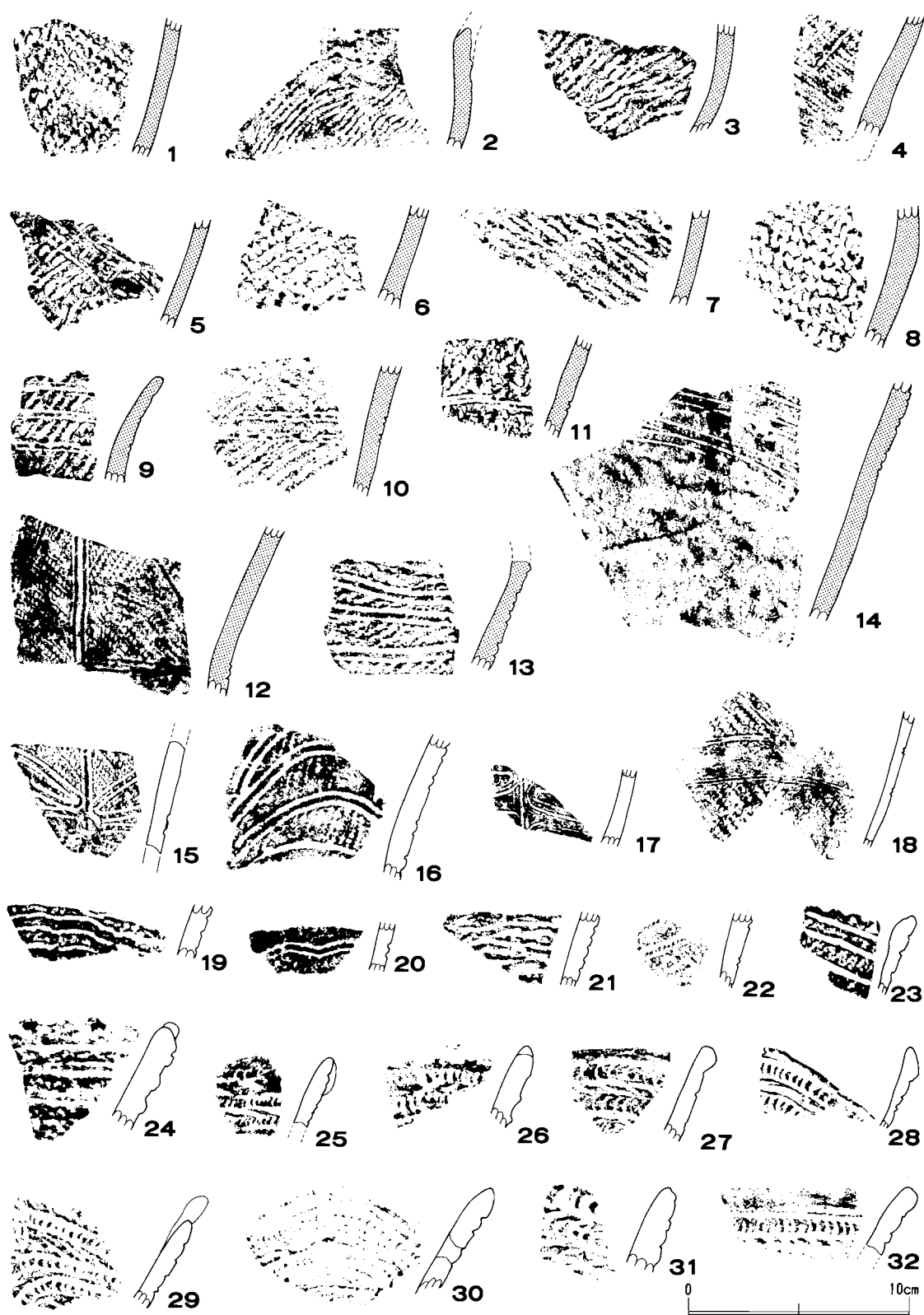
第3群土器（第11図15～第15図6）

前期後半諸磯式土器に比定される土器を一括した。本群が遺構等に伴う時期である。胎土中には
繊維を含まなくなったものを本群とした。色調は黄褐色系を呈するものが多い。胎土は砂粒子を多
量に含みざらつきが目立つ。文様は半截竹管による平行沈線文、爪形文、結節爪形文、円形刺突文
等が施文される。これらは次の12類に分類される。

A類（第11図15～17） 半截竹管による平行沈線で、所謂助骨文を一括した。15は地文単節縄文
RLを縦位施文し、平行沈線による縦区画の後、円形刺突文を施す。この間を弧線によって助骨文
を描出する。15は縦区画の間を弧線で結ぶ。17は縦区画の後、U字状に描く。胎土は砂粒を含むが
堅牢である。

B類（第11図19～21） 平行沈線による山形、もしくは波状文を一括した。18は地文縄文で平行
沈線による波状文を描く。19は地文は無く1条の山形文を施文する。これは直線文との交互配置に
よって文様帯を形成すると思われる。20は地文縄文で波状文を密に施文した後、半截竹管による斜
めの刺突を縦列に施し縦区画化を残す。

C類（第11図18、22） 平行沈線による木の葉文あるいは入組状木の葉文を一括した。17は地文
単節縄文RLを横位に施文し、幅の狭い平行沈線により木の葉文を描き、無文部は磨り消されてい



第11图 B地区出土土器拓影图

る。21は地文縄文の後、平行沈線内に爪形文を充填されている。また、文様内に円形竹管による刺突文がされている。

D類（第11図23、24） 幅広の平行沈線を一括した。22は波状口縁部で口唇部は山形の刻みを施す。地文縄文の後、平行沈線2条1単位を2単位施文し区画とする。23は平口縁部で口唇部には瘤を付ける。地文縄文→隆帯貼付→沈線→隆帯縄文の順に施文する。

E類（第11図25～第12図2） 平行爪形文を数列施したものを一括する。25、26、32は平口縁で25は貼付文を持つ。半裁竹管の幅は狭く、また、爪形文も密である。26は口唇部に2つの瘤を付す。文様は半裁竹管による平行沈線→施文角度の強い爪形文→微隆起帯に刻みを入れる。27～31、第12図1、2は波状口縁である。27、28の口縁の断面は三角形を呈する。29の平行沈線の内、2本は下へカーブし主文様と繋がる。30は補修孔を持つ。30は幅広の工具で、口縁に接する。第12図1は緩やかな波状口縁で、口縁部に指圧による波状隆起を施す。

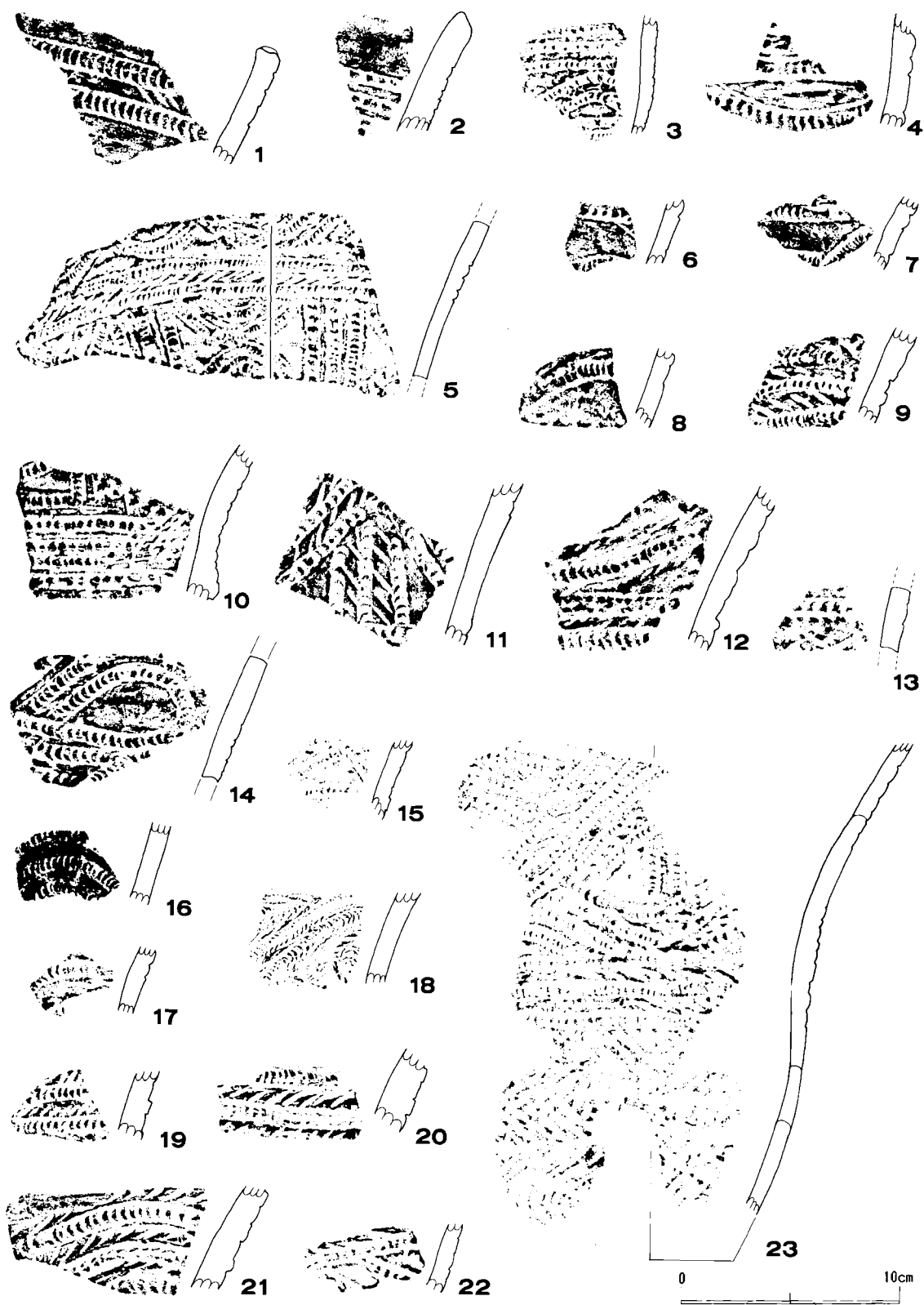
F類（第12図3～第13図4） 連続爪形文と曲線文とによって文様を施すものを一括する。

1種 連続爪形文によって曲線的に描かれるもの。3は頸部に平行爪形文を数条施し縦位区画とし、更にその下を数本の横区画をする。この間に2本1単位とする弧線を施文する。4も横位の区画文に弧線文を施す。5は直線的に外反する深鉢で胴部に平行爪形文2条とこの間に刻みを入れ横位の区画文とする。上部文様は主波状文と弧線を連続に描出する。下部は3条1単位の縦位区画を施し、この間に上下に向く弧線文を施文する。下端には横位の区画文が想定される。6は上下に向く弧線文。8、9は連続爪形文で曲線を描く。12は幅広の平行爪形文により、横位区画文及び曲線文を施文する。14は木の葉状入組文を描く。16は平行爪形文により渦巻状に描く。18は爪形文が密に施文され渦巻を描く。19～21は連続爪形文により曲線文が描かれ、列間に刻みを施す。23は頸部でやや括れ口縁部が強く外反する。頸部に3条の平行爪形文と刻みにより横位区画文とし、胴部は単節縄文RLの羽状縄文を横位に施文する。口縁部文様は連続爪形文3条により波状に描き、波頂部又は波底部の反対側に弧線によってうめる。爪形文列間に刻みを持つ。胎土は砂粒、白色不透明粒等を多く含む。内面は念入りの研磨を施す。明褐色を呈する。

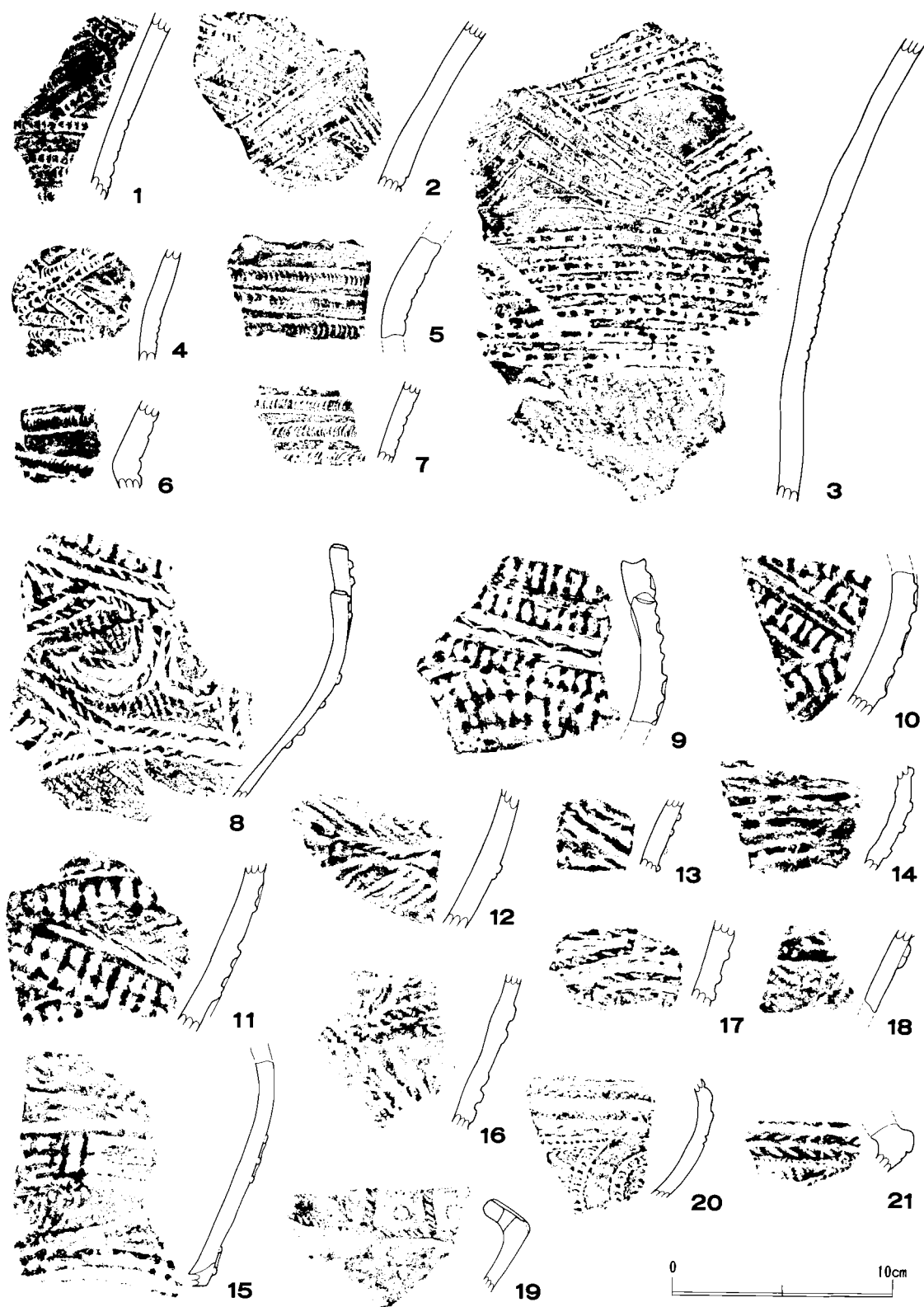
2種 連続爪形文によって直線的に描かれるもの。第12図10は頸部に爪形文による数条の横位区画文を施文し、上部に3条1単位による菱形モチーフを描く。11も胴部で横位区画し上部を山形もしくは菱形モチーフで直線的に描出する。第13図1は胴部に横位区画し、菱形文もしくは山形文を施文する。2、3は同一固体である。胴部下は円筒形で口縁部に向けて外反する深鉢である。胴部は単節縄文RLを横位に施文する。頸部に連続爪形文を6条施し区画とする。口縁部文様は3条～6条により菱形モチーフを描くが、横位の区画文に接した山形文の連続を施した後、波頂部間を山形文で繋げて菱形に描出する。4は横位区画し、口縁部文様を2条の爪形文によってX字状または山形文を描く。

G類（第13図5～7） 幅広の連続爪形文で特に爪形文が密に施文されるものを一括した。本来A～F類内に分類される。5は頸部で括れ口縁部が強く外反する。6は頸部がくの字状に屈折する。木の葉文もしくは菱形文が描かれる。7は直線的に外反する器形である。

H類（第13図8～19） 浮線文を曲線的に施したものを一括する。8は口縁部が外反しながら直



第12图 B地区出土土器拓影图



第13图 B地区出土土器拓影图

立に立ち上がる、4単位の波状口縁である。キャリパー形と思われる。地文に単節縄文RLを横位に施文する。浮線2条によって横位区画し口縁部文様帯を作る。文様は浮線により変形した木の葉状入組文を描き浮線には刻みを施す。口唇部にも浮線を貼付ける。9～12は同一固体である。器形は口縁部がやや内湾ぎみに立ち上がり、頸部でやや括れる大型のキャリパー形を呈する。9～11は口縁部であり浮線3条と列間に更に浮線を貼付け、モチーフは曲線的に描かれていることから8同様に木の葉状入組文と思われる。地文は単節縄文RLの横位施文。12は胴部で幅が狭く数段に横位区画された胴部文様である。13は口縁部が外反しながら立ち上がる。口縁部下端横位区画文と曲線的に浮線が施される。14はやや内湾ぎみに立ち上がる。口縁部区画文が数段施文される。15は胴下半部で横位の区画文を施す。充填縄文は単節縄文LRの横位施文である。16は浮線2条1単位とし、交差する。縄文は単節縄文RL。17は曲線的に描く。18は口縁部下端区画で、縄文は単節縄文RLを羽状縄文として施文する。19は口縁部がくの字状に屈折する鉢形土器である。口縁部には2つの穴を持つ。浮線文により区画化が成される。

I類(第14図1～4) 地文縄文で胴部に半裁竹管による連続爪形文を施文するものを一括する。1の地文は単節縄文LRの横位施文で、頸部に幅広の連続爪形文により1次区画文としている。2の器形は直線的に外反する。地文は撚りの細い単節縄文RLと単節縄文LRとにより、それぞれ横位に施文し波状縄文を描出する。1次区画文は幅狭の平行沈線によって施される。3は頸部でやや括れる。地文は単節縄文RLを横位に施文し、連続爪形文によって1次区画文とする。4の器形は胴部上半で立ち上がり、頸部から口縁部に向けて外反する。地文は単節縄文LRの縦位施文を施すが、胴下半では施文が流れる。幅広の連続爪形文により1次区画文が施される。

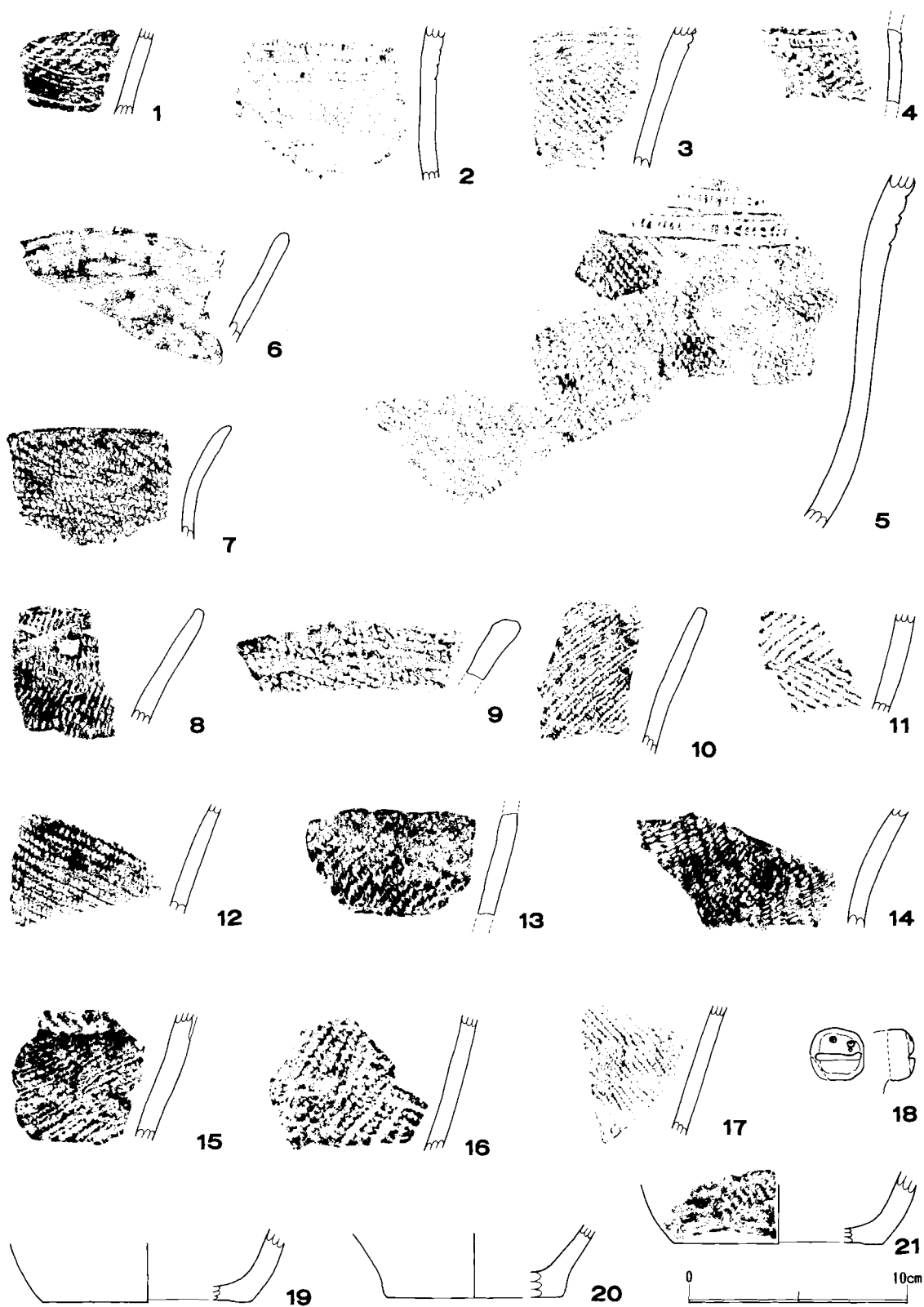
J類(第14図5) 無文土器である。口縁部は波状を呈する。器形は鉢形を呈する。胎土には砂粒、褐色粒、雲母系の粒子を含む。

K類(第14図6～17) 縄文のみを一括する。本来A～L類に分類されるべきものである。6は口縁部が強く外反する。単節縄文RLの縦位施文。7は原体が他に比べ長い単節縄文RLを縦位施文する。8は外反する口縁部で、撚りの弱い単節縄文RLを斜位施文する。9は無節文の横位施文。13は単節縄文RLを横位、縦位に施文し羽状縄文を描出する。11は単節縄文RLの縦位施文。12は単節縄文RLの横位施文。10は頸部で直立し口縁部へと外反する。原体は撚りが弱く単節縄文LRを縦位または斜位に施文する。15は細かい単節縄文LRを縦位施文。16は単節縄文RLを縦位施文。17は単節縄文RLを横位施文し、上から下の順に施文する。

L類(第14図19～21、第15図1～3) 底部を一括する。19は胴部が張り、単節縄文RLを縦位施文。20、21は胴部が円筒形を呈する。単節縄文RLを縦位施文。2の底は凸レンズ状を呈する。3は胴部が張る器形を呈する。無文である。

第4群土器(第15図4、5)

前期後半諸磯C式土器に比定されるものを一括する。4は口縁部が強く内湾する。口縁部文様帯としての1次区画文として多条線を施す。口縁部は幅狭の半裁竹管による集合条線で横方向の矢羽状文を描き、また、装飾としての貼付瘤を持つ。胴部は縦方向の集合条線が交差する。胎土は白色



第14图 B地区出土土器拓影图

粒、褐色粒を多量に含む。堅緻である。色調は黄灰色系である。5は口縁部が外反する。集合条線を横位に施し、縦に貼付粘土と刺突された貼付瘤を施す。色調は褐灰色を呈する。

第5群土器（第15図6）

中期後半加曾利EⅢ式に比定される。懸垂文は沈線により区画された内側に単節縄文RLを縦位施文し、無文部を研磨する。内面は横位の研磨。

第6群土器（第15図7）

後期初頭称名寺土器に比定される。深い沈線により描き、この内に単節縄文RLを充填する。胎土は砂粒を多量に含みざらついている。色調は暗黒褐色を呈する。

第7群土器（第15図8～17）

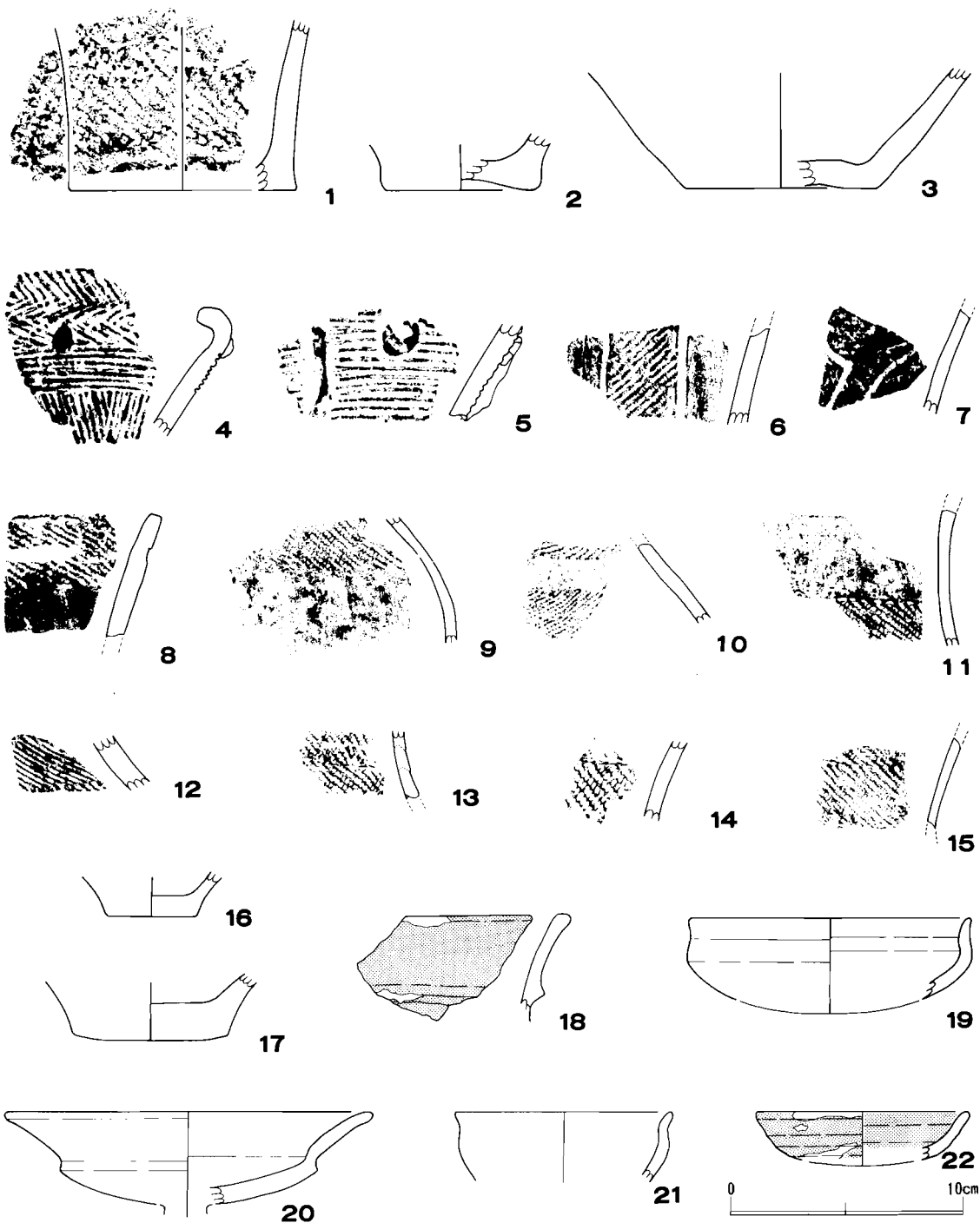
弥生土器を一括する。8は壺の口縁部で撚細単節縄文RLを縦位施文する。下には無文部を持つ。9は壺で胴上半部に撚細単節縄文RLを横位施文する。10、12は無文部を持つ。撚細単節縄文LRを横位に施文する。11は壺の頸部にあたり撚細単節縄文RLを横位に施す。原体の末端は結んでいる。13、15は甕の胴部上半部又は頸部である。粘土帯痕を残す。縄文は単節縄文RLを横位に施文する。14はやや縄文原体が太い。16は壺の底部。17は甕の底部と思われる。

第8群土器（第15図18～20）

土師器を一括する。18は壺の口縁部で直立ぎみに立ち上がる。口縁部下に隆帯を1条配す。朱を施す。20は高坏の坏部である。口縁部は逆反し、陵を持つ。19は坏で口縁部はやや括れる。

第9群土器（第15図21～22）

中世遺物を一括する。21は天目茶碗である。口径10cmを測る。22は瀬戸産で、胎土には砂粒子を少量含む。色調は素地が灰白色、施釉部分は白色を呈する。



第15图 B地区出土土器拓影图

3. 石 器

北廓遺跡から出土した石器類はすべてB地点であり、種類別では打製石斧・磨製石斧・礫器・磨石・敲石等がある。出土位置は縄文土壌のみならず中世遺構やグリットからも検出されている。

第16図1は打製石斧であり、その形態は撥形を呈し、正面に自然面を残す。基部を欠損している。刃部の形状は直刃で磨耗が顕著である。調整加工は終縁に施されている。長さ7.6cm、幅5.3cm、厚さ2.9cm、重さ148g。

第16図2は打製石斧であり、その形態は撥形を呈する。作りは裏面に打割面を残す。刃部の形状は円刃であり、調整加工は裏面から角度をもつ剥離で行われている。長さ11.4cm、幅7.4cm、厚さ3.6cm、重さ154g。

第17図1は打製石斧であり、その形態は分銅形を呈し、正面に自然面を残す。基部を欠損している。刃部の形状は直刃で磨耗が顕著である。調整加工は終縁に施されている。長さ7.4cm、幅5.2cm、厚さ2.4cm、重さ145g。

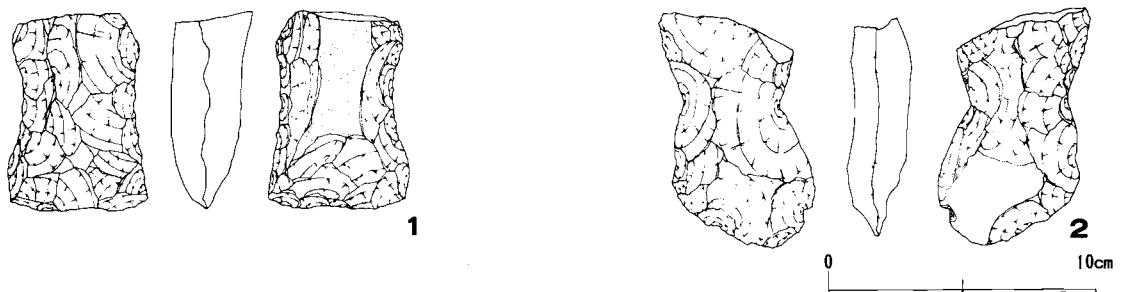
第17図2は打製石斧であり、その形態は分銅形を呈する。作りは裏面に打割面を残す。刃部の形状は直刃であり、調整加工は裏面から角度をもつ剥離で行われている。長さ8.2cm、幅5.3cm、厚さ2.3cm、重さ250g。

第17図3は打製石斧であり、幅に対し長さの短い小型品となっている。裏面に自然面を残す。刃部の形状は一部欠損するが円刃である。調整加工は終縁に施されている。長さ7.8cm、幅6.2cm、厚さ2.8cm、重さ180g。

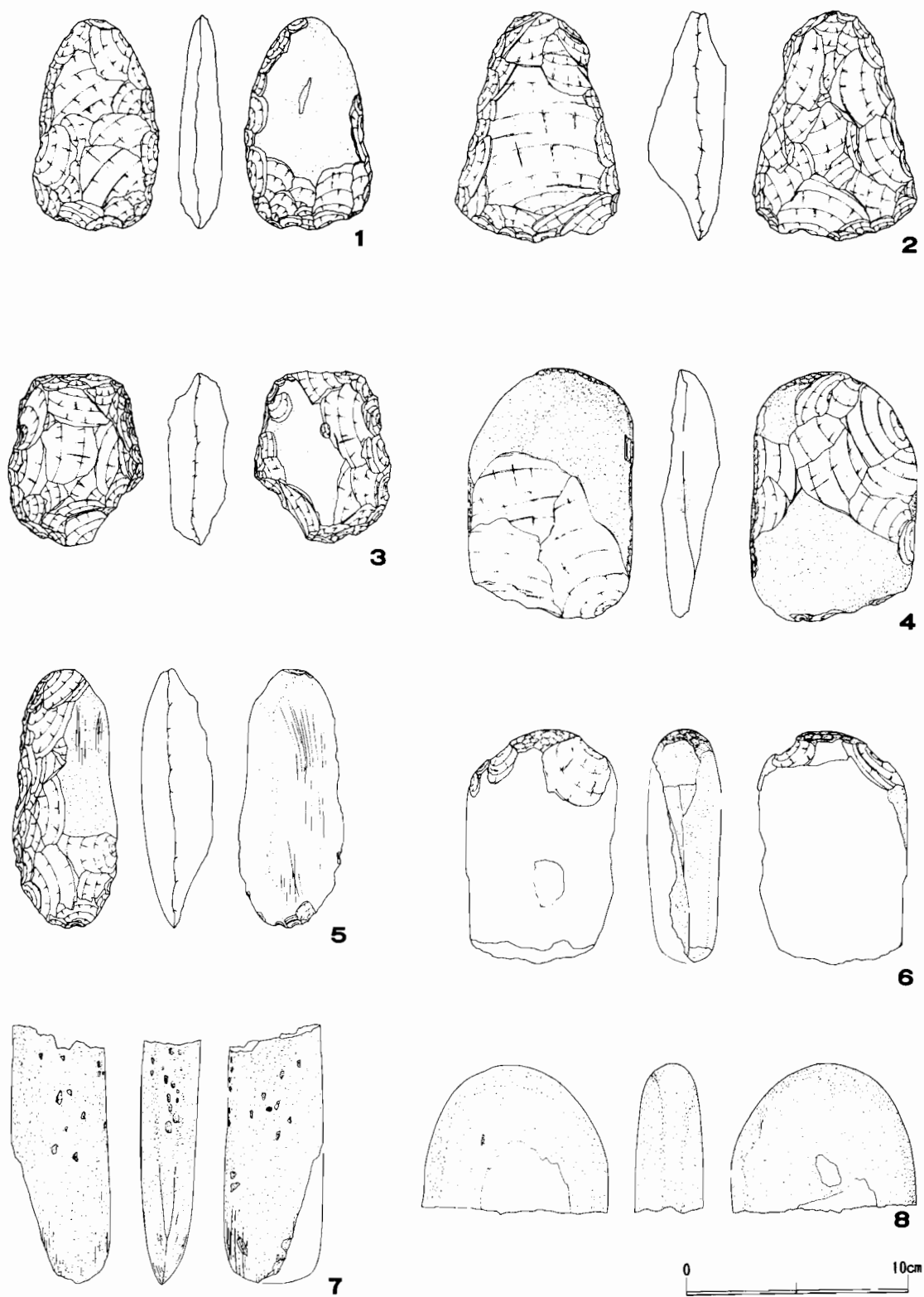
第17図4は大型礫器であり、両面に自然面を残す。基部端部や体部側縁には敲打痕が見られる。長さ11.5cm、幅7.4cm、厚さ2.3cm、重さ225g。

第17図5は打製石斧であり、その形態は短冊形を呈する。作りは裏面に打割面を残す。刃部の形状は円刃であり、調整加工は裏面から角度をもつ剥離で行われている。長さ11.4cm、幅7.4cm、厚さ3.6cm、重さ250g。

第17図6は敲石である。敲打痕は一方であり、この敲打により剥離痕が片面にのみ見られる。ま



第16図 B地区出土石器実測図



第17图 B地区出土土器实测图

た、表面の中央に敲打痕がありくぼみを見る。長さ11.6cm、幅6.9cm、厚さ3.2cm、重さ278g。

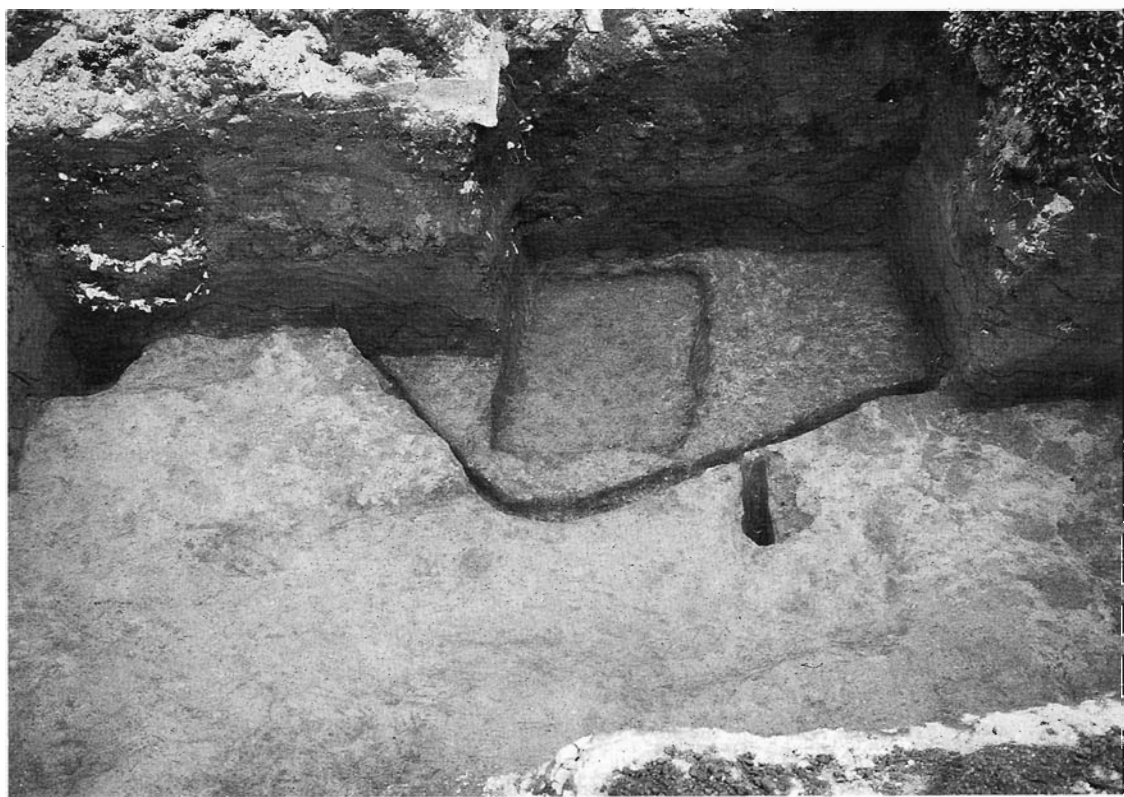
第17図7は局部磨製石斧である。刃部の研磨は比較的入念であり、形態は刃部である。長さ11.7cm、幅4.4cm、厚さ2.6cm、重さ231g。

第17図8は磨石である。形態は半欠損しているが楕円形の偏平礫を素材としており、側縁に敲打痕が顕著である。長さ6.7cm、幅8.4cm、厚さ3.2cm、重さ257g。

遺 構		出 土 遺 物
A 地 区	第 1 号 住 居 跡	第 6 図 1～11
	第 1 号 方 形 周 溝 墓	第 6 図 12～18、37
B 地 区	第 1 号 土 壙	第11図28、第12図10、11、第14図3
	第 2 号 土 壙	第10図25、29、32、第11図3、第12図5、第14図4
	第 3 号 土 壙	第10図4、7、14～16、26、28、33、35、第13図2、3、第14図4、17
	第 4 号 土 壙	第10図19、第13図20、第14図1
	第 6 号 土 壙	第12図3
	第 8 号 土 壙	第15図5
	第 1 号 柱 穴	第15図6
	第 2 号 柱 穴	第11図12、31、第12図14、32
	第 3 号 柱 穴	第13図1、第14図8
	第 4 号 柱 穴	第12図19
	第 7 号 柱 穴	第12図18
	水 溜 井 戸	第10図2、14、第11図1、9、10、13、19、26、第13図4、7、16、第15図4、8、18

第1表 B地区出土遺物表

写真図版



図版1 第1号住居跡



図版2 第1号方形周溝墓



图版 3 B地区全体



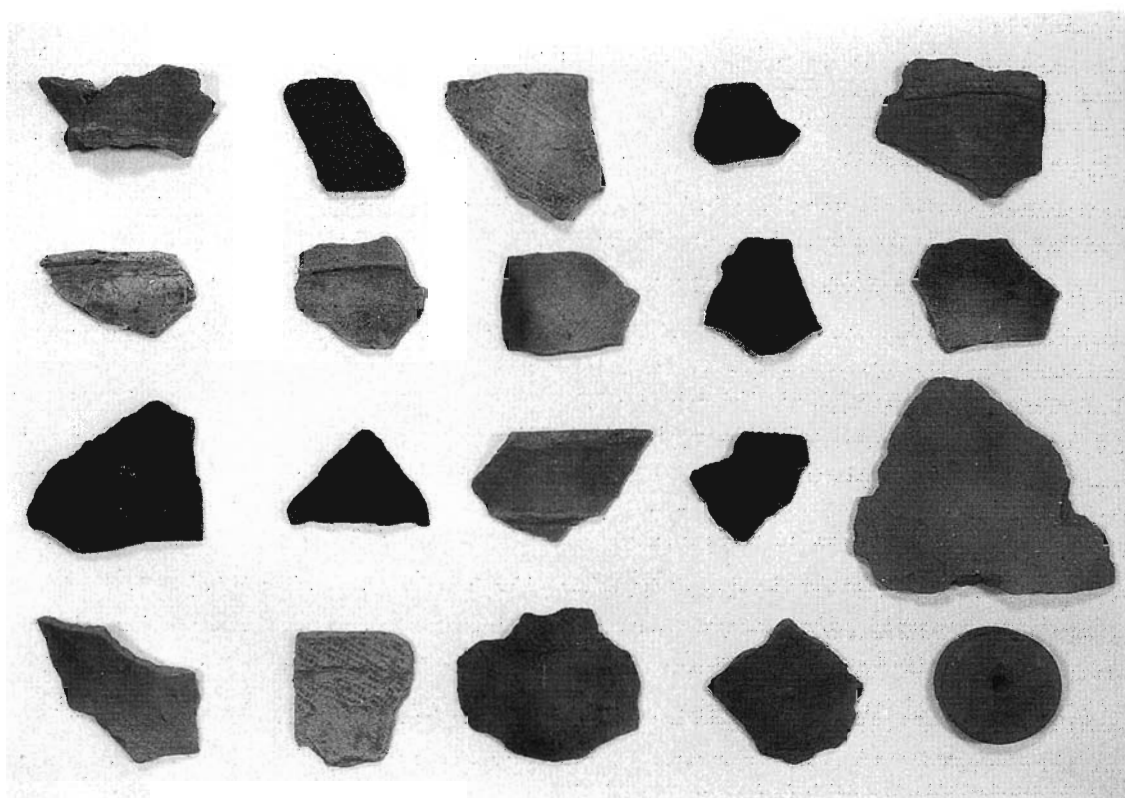
图版 4 土壙・柱穴群



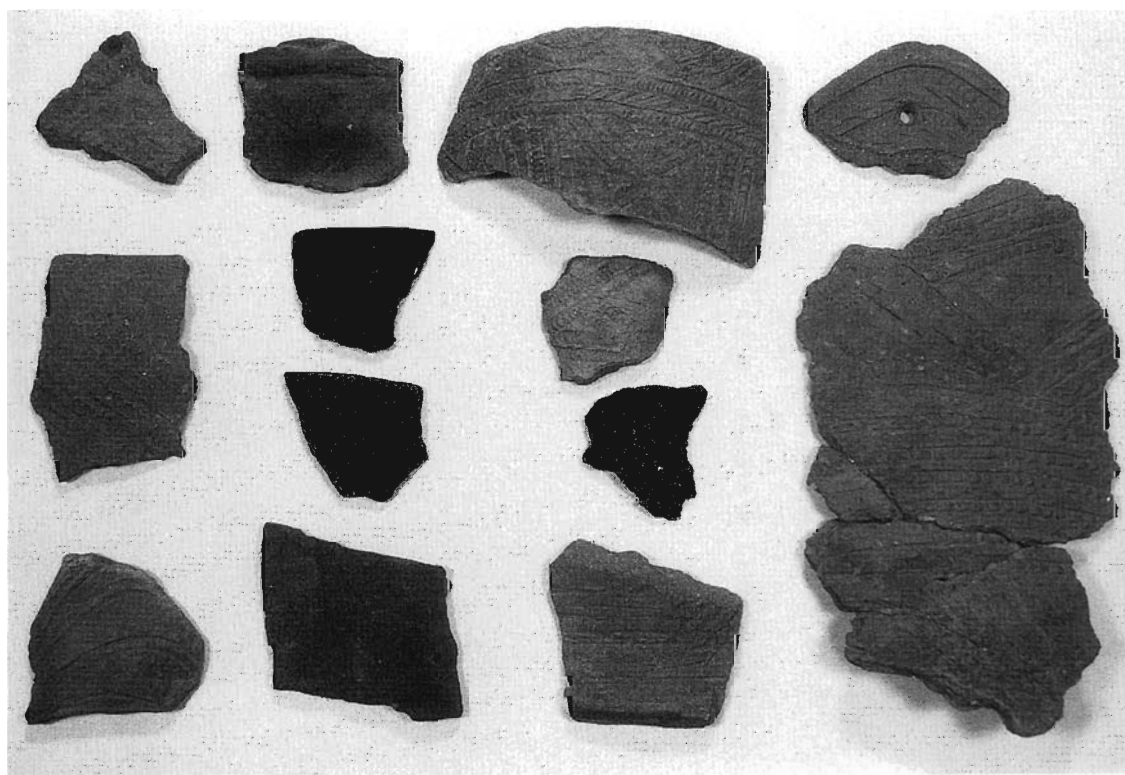
图版 5 柱 穴 群



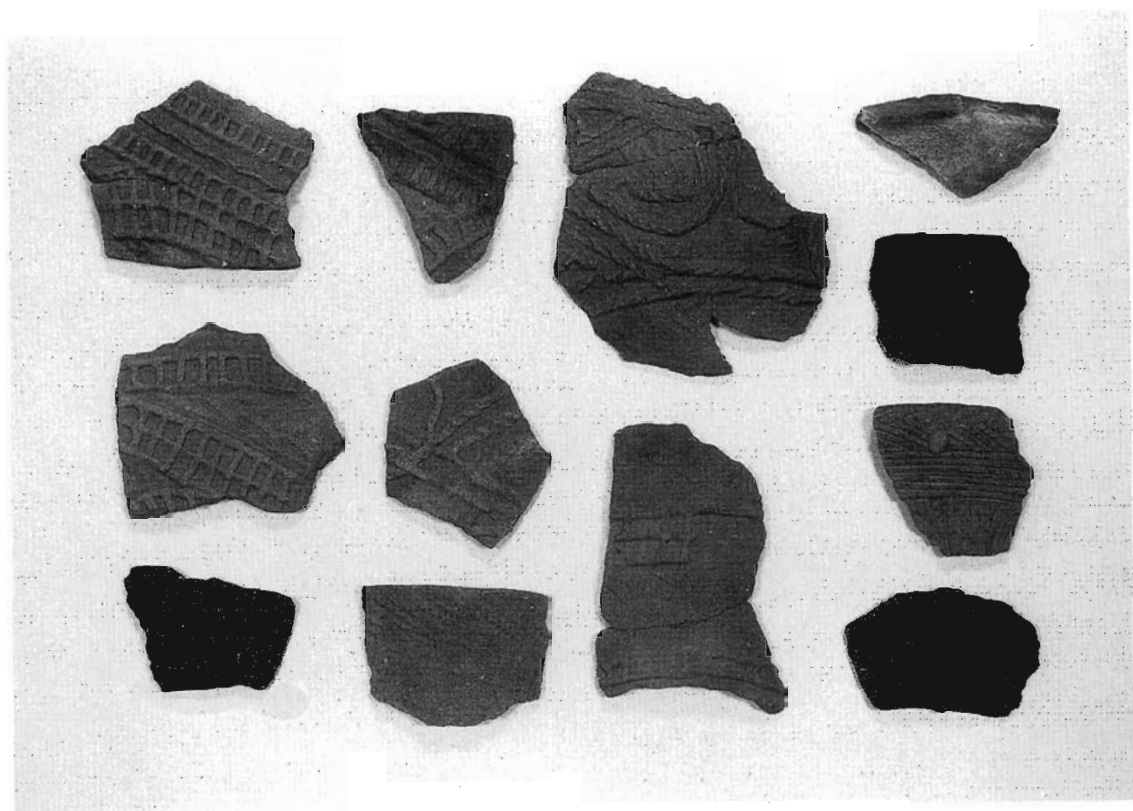
图版 6 B地区遺物出土状态



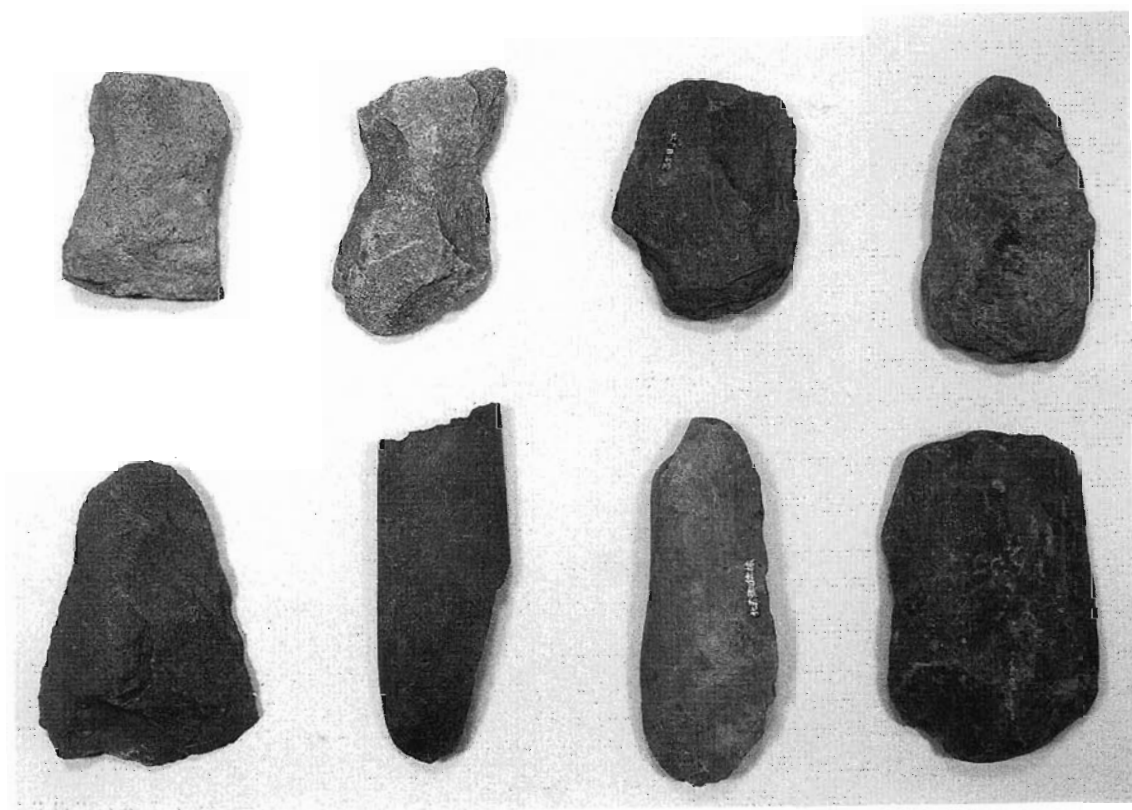
图版 7 A地区出土土器



图版 8 B地区出土土器



图版9 B地区出土土器



图版10 B地区出土石器

大里村文化財調査報告書 第1集

北 廓 遺 跡

昭和63年3月21日 印刷

昭和63年3月31日 発行

発 行 大 里 村 教 育 委 員 会

印 刷 た つ み 印 刷 株 式 有 限 公 司